

ちやんとした道

とき

八月の夕方。

ところ

一時間に一本しか電車が止まらない小さな駅の前にある公園。

登場人物

女

駅員

医者

青年

男

若い女

婦人

紳士

# 1 不幸な話と五百円玉

ピアノの音。

ピアノの先生が弾いていると思われる、非の打ちどころのない完璧な演奏。蝉の声。

とぎれとぎれの、メロディになっていないピアノの音。

小さな東屋と百葉箱のある緑にかこまれた公園。

扇子でしきりに顔を扇ぎながら女が現れ、ベンチに鞆を置き、中から大きなブタの貯金箱を取り出す。さらに、「営業中」という札を取り出し、ベンチに立て掛けてみたり、ブタの首からさげてみたりと配置に苦心する。

その前を青年がウォーキングと呼ぶにはあまりに速いスピードで通り過ぎ、去る。

女、「営業中」の札とブタの位置を決めるとベンチに座り、扇子を動かす手は休めず、本を読み始める。

やがて若い駅員が箒とチリとりで掃除をしながら後ろ向きで現れる。辺りを掃きながら少しずつ女の方に近づき、ちらちらと様子をうかがっている。

女 (本から目を離さず) いらっしやいませ。

駅員 え？ なんですか？

女 不幸な人でしょ？

駅員 いいえ。

女 話をしに来たんでしょ？

駅員 いいえ。(必要以上に辺りを掃き散らかす)

女 駅員がどうして公園の掃除までするのよ。

駅員 ここは駅前公園ですからね。

女 ゴミなんか落ちてないじゃない。

駅員 私、目がいいもので小さなゴミでも気になるんです。

女 小さなゴミが気になるのは不幸の一種じゃない？

駅員 こう暑くちや商売もあがったりですね。

女 聞くわよ。不幸な話ならいくらでも。五百円玉一枚で。

駅員 昨日の大雨で少しは涼しくなるかと思ったら、かえって蒸し暑くなっちゃつて。

女 びっくりするくらい気が楽になるから。

駅員 湿度九〇%はありますよ。

女 五百円玉一枚だよ？ 安いもんじゃない。

駅員 夕方になってもこれじゃあねえ。

女 ……人の話を聞きなさい。

駅員 お客さん、来ました？

女 おめでとう。あなたが第一号よ。

駅員 残念ながら私は……。

女 なにかつらいことがあったのね。だから仕事をサボってる。

駅員 サボってませんよ。百葉箱を見にきたんです。

女 さっきは掃除って言ったじゃない。間違いない。あなたは不幸な人。その証拠に、つまらない嘘をつくし、姿勢が悪い。第一、笑顔が不気味なもの。

駅員 夕方の日課なんですよ。

女 百葉箱を覗くのは駅員の日課じゃないはずよ。

駅員 この時間は一時間に一本しか電車が来ないもんで。

女 電車が来なくなったらって仕事はあるでしょ？

駅員 例えば？

女 例えば……遺失物の管理をしたり、なにか連絡を取り合ったり、それから……満員電車に乗客を押し込んだり……それは電車が来た時か。

駅員 あなた、都会の人ですね。

女 あたしのことはどうでもいいの。

駅員 こんな田舎町より地元で商売した方が儲かるんじゃないですかね？

女 田舎にだって不幸な人はいるでしょう？ あなたみたいだね。

駅員 ああ、花火見物のお客目当てか。

女 なに？

駅員 昨日の花火大会なら、一週間後に延期ですよ。今日じゃありません。どっちにしてもここからは見えないんじゃないかなあ。

女 ごまかそうとしてもダメよ。話してごらんさい。仕事がイヤになったのはなぜ？ お給料が安いから？ どうしてつまらない嘘をつくようになったの？ 売上金をピンはねしてるから？

駅員 あ、そろそろ電車が来るかな……。

駅員、へらへらとごまかしながら、退場。女、無念そうに見送る。

そこへ再び青年が現れる。

目の前を通り過ぎようとする青年に、女、わざとらしく激しい咳払い。

青年 (その場で大きく足踏みをしながら) 風邪？

女 不幸？

青年 ん？

女 (営業中の札をちらつかせ) これ。

青年 なに？

間。

その場で激しく足踏みを続ける青年。

見つめあう二人。

青年 風邪、あつたかくして寝なさい。

青年、退場。女、首をかしげ、読書に戻る。

その様子を、東屋の後ろ、植え込みの陰からこっそり覗いている駅員。この後、顔を出したりひっ込めたりを繰り返す。

次に、くたびれたサラリーマン風の中年男がきよろきよろ上を見ながら現れ

る。

反対側から、腰を曲げ、探し物をしているかのように下を見ている初老の婦人が現れる。

二人、女の前でぶつかる。

女、消極的に「営業中」の札を二人の方にアピールしてみせるが、二人ともそれには気づかず、お互い軽く謝罪しあって、それぞれ再び上や下を見ながら去っていく。

やや疲れ気味の女のもとへ男（医者）が現れる。

医者 不幸な話を五百円で聞いてくれるって、あんた？

女 いらっしやいませ。

医者 いいのか？ 話すぞ？

女 どうぞ。

医者 今、急に腹が痛くなって駅のトイレに寄ったんだけど、そこでうっかり財布を流した。

間。

女 ……それで？

医者 不幸な話だと思わないか？

女 それは不注意な話でしょ？

医者 いや、続きがある。しかたなく車に戻ってドアを開けようとしたところ……慌ててたんだな。車のキーをドブに落とした。

女 ……だから？

医者 帰れない。不幸な話だと思わないか？

女 思わないけど。

医者 帰れないんだぞ？

女 ……遠いの？

医者 仕事場はすぐそこだけど誰もいないんだ。看護婦も帰しちゃったし。

女 あなた、お医者さん？

医者 ああ。

女 開業医？

医者 まあな。

女 儲かってる？

医者 まあまあな。

女 若いのに。

医者 二代目だからな。

女 自分の病院なら鍵があるでしょ。

医者 車の中にな。

間。

女 誰かに連絡すれば？

医者 電話も金も持ってない。

女 お医者さんならお札さつの二、三枚ポケットに入れときなさいよ。

医者 (ポケットを探り) さっきまでは小銭が入ってたんだけど……。

女 だけど？

医者 ……アイス買って食っちゃった……。

女 (呆れて) 事情を話して、そのお店でお金借りればいいじゃない。

医者 もう閉まってるだろ。店じまいしてるのに無理言って売ってもらったから。

女 ……そのアイスのせいでトイレに駆け込むことになり、財布を流した上、車が  
開かない、と。

医者 ……結果的にはそうなる……。

女 どうしてそんな自分を追い詰めるようなことをするのよ。

医者 わざとじゃない！

女 で？ お金もないくせに、あたしになんの用？

医者 ……五百円、もらえるんだよな？

女 あたしがね。

医者 俺だろ？

女 あたしです。

医者 俺だよ。

女 あたしなの！（駅の方を指さし）もう一回確認！ 伝言板まで駆け足！

医者 『五百円玉一枚で、あなたの不幸な話を聞きます』だろ？ ふつう話す方が  
もらうんじゃないのか。

女 話を聞いてやるのにどうしてこっちがお金を払わなきゃいけないのよ！ それ  
に、あんたのは不幸な話じゃなくてただの失敗談でしょ。

医者 じゃあなんだ、俺は恥をかきに來ただけか？

女 買い食いなんて小学生じゃあるまいし。大体、医者のかせに自分のおなかの調  
子もわかんないの？

医者 俺は耳鼻科医なんだ。首から下のことなんて知るか！

女 いばらない！

医者 ……（言いたくなさそうに）とりあえず、電話代でいいから貸してください。

女 駅の人に頼みなさいよ。

医者 駅に誰もいないから、伝言板見てわざわざ來てるんだよ。

駅員、植込みの向こうで舌を出し、頭をかく。

女 お金は貸せません。

医者 必ず返す。

女 （暗い顔）……お断りします。

ひどく悔しげな医者。

そこへ、またもや青年が現れる。

医者、通り過ぎようとする青年の襟元をつかまえる。

医者 (青年に) ちよつとちよつと。

青年 (つかまえられながらも、体を動かし続け) なに？

医者 小銭、持つてる？

青年 コゼニ？

医者 十円でいいんだけど。

青年 ない。

医者 そうか……。金に頼らないだけあって、いい体してるな。そこを見込んでひとつ頼みがあるんだ。お急ぎのところ申し訳ないけど、ドブ板はずすの手伝ってくれないか。

青年 はい。

医者 助かるよ。(女にあてつけるように大声で) ああ、世の中には親切な人もいるんだなあ。危うく人間不信になるとこだった。

女、無視。医者と青年、退場。

女が読書に戻ろうとすると、どこから歌声が。

(歌声) ♪た〜まね〜ぎ、に〜んじ〜ん、じゃ〜がいも〜、そし〜て、な〜くによ  
り、お肉〜、お肉〜、お肉〜がなくちや〜は〜じま〜らな〜い♪

やがて初老の紳士が買物籠を手に、朗々と歌いながら通り過ぎる。

紳士 ♪きよ〜う〜は、お〜い〜しい〜ビーフシチュ〜、ほっぺがお〜ちて〜も、知  
く〜らな〜いよ〜♪

紳士、歌いながら退場。

女、ただただ見送る。入れ替わりにさっきのサラリーマン風の男が再び現れ、  
ちらちら女の方を気にしている。

女 ……なに？

男 ……？

女 伝言板、見た？

男 伝言…？ あ、いえ…、すみません…。

女 ……どうして謝るの？

男 え？…ああ、すみません…。

男、そそくさと退場。

女、訝しげに見送り、読書に戻る。

医者が重い足取りで汗を拭いながら戻ってくる。

医者 (やや息を切らせ、暗い面持ちで) ……手伝ってくれ…。

女 なにを。

医者 人手がいるんだ…。

女 大の男が二人そろってドブ板もはずせないの？

医者 ちよつと状況が変わった…。

女 他に誰か…。

医者 (女を引っ張り) 誰かいたらあんたなんか頼まないって。金はいいから、力ぐらい貸してくれよ。

女 今ものすごく暇そうなのが二人も通ったのに…、(さらに引っ張られ) ちよつと、それが人にものを頼む態度？

医者 (口だけ丁寧に) 本当に、ものすごくお忙しそうなところ、すみませんがお願いします。でもねえ、不幸な話を聞くだけが人助けじゃないんですよ。

女 (慌てて荷物をつかみ、連れて行かれながら) なによ、その汗！

医者 来てみりゃわかるって。

医者と女、退場。

男が恐る恐る戻ってくる。辺りを見回し、誰もいないことを確認すると、ため息をつき、一本の木を丹念に眺める。やがてベンチに腰掛け、ポケットからロープを取り出し、再び深いため息。

そこへ若い女が現れ、やはりベンチに腰掛ける。

男は若い女が気になって、そわそわと落ち着かない。

若い女 （大声で男に）なあに。

男 （びっくりして）すみません！（こけつまろびつ、逃げるように退場）

若い女 （男がロープを置いていったことに気づき、さらに大声で）ちよつと！

忘れ物！（男の後を追って退場）

駅員、植え込みからひょっこり顔を出す。

腕時計を確認し、百葉箱の戸を開け、記録を取る。

踏切の音。

駅員、その音に慌てて退場。

暮れていく公園。

## 2 自殺と蓄膿

照明は再び陽の長い夏の夕方。翌日。

蝉の声。

非常にたどたどしいピアノの音。

男が現れ、例の木の下に立ち止まり、ポケットからロープを取り出す。

そこへ小さなビニール袋を手に、前場同様、前かがみの姿勢で婦人が現れ、同じ木の下にしゃがみこみ、なにかつまみあげて袋に入れる。

二人、目が合う。

婦人 暑いですねえ。

男 ええ……。

婦人 昨日もお会いしましたね。

男 すみません……。

婦人 ……謝ることないんじゃないやありません？

男 そうでした……。すみません……。

婦人 ……。(ロープを見て)ワンちゃんのお散歩ですか？

男 え？ あ！ ああ、これ……。ええ、そうなんです。どこへ行っちゃったのか

な……。ポチ、ポチや！

男、犬の名前を呼びながら、慌てて退場。

婦人、不思議そうに見送るが、再び、木の幹や足元を気にしながら退場。

それに前後して、女が登場。

貯金箱のセッティングを終えるとベンチに座り、扇子で顔を扇ぎながら本を読み始める。

そこへ医者、登場。

医者 よお。

女 ……。

医者 もう筋肉痛で参ったよ。車なんて持ち上げるもんじゃないな。

女 修理にいくらかかるって？

医者 五十万で済めば御おんの字かな。

女 ……どうして鍵を拾った後すぐにドブ板をはめなかったの？

医者 脱輪するなんて思わなかったから。

女 使ったら戻す、整理整頓。それを怠けるから、高い授業料を払うことになるのよ。

医者 ついてないよ、まったく。なんで俺が……

女、医者に手のひらを出す。

その手をじつと見る医者。

医者 ……首から下は診ないんだけど。

女 五百円。

医者 なに？

女 細かいのじゃダメだからね。ちゃんと五百円玉で払ってよ。

医者 車が壊れたのは不幸じゃない。不運だ。

女 今、「なんで俺が」って言ったじゃない。不運が納得できない。現状に満足できない。それが不幸というものよ。

医者 幸せじゃないからって不幸とは限らないだろ。

女 幸せを否定するなら、それは不幸です。

医者 (なにか言い返そうとしたが、気をとりなおして慇懃に) 昨日、僕の車、ご覧になりませんでした？ ご存じかとは思いますが、いわゆる高級外車なんですよ。優しい両親からこの若さで病院をひとつ受け継ぎましてね。生きていく上である程度の挫折も必要かとは思いますが、僕の場合は……そうねえ、「人生、山あり谷なし」って言うのかなあ。おまけに、この通りの男前でしょう？ 家に帰れば美しい妻と可愛い子供が……いないのが不思議なくらいなんです。

女 ……悲しい自慢話にしか聞こえない。

医者 ただの自慢話なんだよ！ 悲しくなんかない！

女 わざわざそんなことを宣言するのは自信がないからでしょ？

医者 ……さてはお客が来てないな？

女 まだあんたしかね。

医者 人を勝手に客と思うな！

女 じゃあなにしに来たの。

医者 あんたには関係ない。

女 昨日のお礼なんて別にいいわよ。五百円、払ってくれれば。

医者 わかんない女だな。あんた原田のばあさんの親戚じゃないのか？

女 誰よ、それ。

医者 どこも悪いとこなんか無いって何遍言っても、毎日無駄話むだばなししに来るばあさんがいるんだよ。この町はな、そういうのんきで幸せな奴ばかりだぞ。そんな商売したって無駄だね。

女 意味もなくまわりの人が幸せに見えるのは、不幸への階段を降り始めている証  
扱よ。(手を出す)

医者 払わないって言ってるんだろ！

女 不幸な上にケチなんて最低ね。

医者 ケチなあ？

女 (扇子で扇ぎながら) あんまり近寄らないでよ。払うものも払わずに、扇子の風にだけはあたらううっていうの？

医者 ケチはどっちだ！

女 (うるさそうに) 暑っ苦しい。

医者 そうさせてるのはあんただろ！

女 うわ、その汗。いくらケチでもハンカチぐらい買いなさい。

医者 ハンカチの前にこのケンカ買ってやるよ！

蝉の声。

二人が言い争っているところへ、青年が前場と同様、ウォーキングをしながら登場。

医者 (青年に) おい！ 俺が不幸せでケチな人間に見えるか？

女 (医者を押しのけ) この顔のどこが幸せで気前のいい人間に見える？

青年 (その場でウォーキングを続けながら二人の顔を見比べ) 運動不足はイライラします。ごいっしょにどうぞ。

間。

二人の前でぐるぐるウォーキングを続ける青年。

女と医者、戦意をそがれる。

医者 ……ちよつと、あんた……。

青年 (歩みに合わせて) ごいっしよに。ごいっしよに。

医者 「ごいっしよに」じゃなくてさ……。

女 ……どうして止まって話をしないの……？

青年 ウォーキングは四十分。(腕時計を確認) はい、四十分。

青年、ウォーキングを終え、そのまま体操を始める。

医者 ……昨日聞き損なったけど、あんた何者？

青年 ダンサーです。バレエダンサー。

医者 いい体してるわけだな。

女 いつもここを通るわよね。

青年 トレーニングは毎日のことです。

三人が話しているところへ、男が戻ってくる。

男、人が増えているのを見て、愕然。

男 (声を震わせ) あんたたちは……なんでいつもいるんだ！

三人、わけがわからず呆然。

男 (植込みに向かって) あんたもだ！ 駅員さん！

植え込みの影から、駅員、姿を現す。

男 仕事があるくせに……なんで働かないんだあ！

医者 ……なんだ？ このおっさん。

駅員 暑さでおかしくなってるんですかね。

青年 運動不足。

女 (駅員に) そこでなにしてるの？

男 (叫ぶ) うわあ〜！

男、わめきながら暴れだす。

駅員 あららら……。

医者 どうしちやっただ？

女 なんなの、一体。

青年 運動？

男 馬鹿にしやがって〜！ (手に持ったロープを振り回し、大暴れ)

医者 うわ、ちよつと、そっち押さえろ！

慌てて押さえにかかる四人。

そこへ初老の紳士が、またもやでたらめな歌を歌いながら通りかかる。

紳士 ♪ミント〜ミント〜さ〜わやかすつき〜り、おいしいデ〜ザ〜ト〜♪

医者 (紳士に) あんたもちよつと手え貸して！

紳士 なになに？

紳士も取り押さえに参加。

蝉の声。

ひとしきり暴れて力尽きた男をみんなでベンチに座らせる。

医者 余計な汗かかせるなよ。

紳士 なにごとだい？

医者 筋肉痛なんだぞ、俺は。

女 (男に) 言いたいことがあるなら、口で言いなさい。

男 ここで死のうって、やっと決めたのに……。

駅員 (やや弾んだ声で) 死ぬ？

医者 自殺する気だったのか？

紳士 そりゃ、なんでまた。

駅員 (朗らかに) 借金ですか？

女 (間髪入れず) いくら？

駅員 (ワクワクと) ギャンブル？ サラ金？ 小豆相場？  
あずき

男 ……友人の連帯保証人になってたんです。

紳士 ああ、私も経験があるから苦労はよくわかるよ。もつとも、私の友人は、迷惑をかけずにきちんと返済したけどね。

女 (男に) それで？ いくら？

男 返済はほぼ済んだんです……。家売った金と退職金で……。

女 だから、いくらだって訊いてるでしょ！

男 いくらだっていいじゃないですか！ 返したんだから。

医者 じゃ、なんで死ぬんだよ。

男 仕事が見つからなかったんです。住むところもないし、食べるのにも困る毎日  
で……。

駅員 (目を輝かせ、男に) それでそれで？

男 妻はそんな私に愛想を尽かして、子供を連れて出て行きました。

紳士 私も妻が家を出ていたことがあるからよくわかるよ。もつとも、うちの場合  
は、孫の面倒を見るために娘のところへ行ってたんだけどね。

医者 連れ戻せばいいじゃないか。

男 ……離婚届が郵送されて来たんです……。

紳士 うちも娘が離婚するといっって別居していたことがあるよ。もつとも、今では  
仲良くもとの鞆におさまってるけどね。

医者 だからって死ぬことないだろ。

男 家族も家も仕事も財産も……私にはもうなんにもないんですよ……。このまま生きていたって……。

紳士 私には家庭的な妻と美人の娘と可愛い孫と、一代で築き上げた大きな会社があるけどねえ、それを失うことを考えると私も……

医者 (紳士に) あなた少し黙ってた方がいいな。

男 それなのにあなたたちは、どうして人が死のうとする夕方になると集まってきたて邪魔をするんです？

女 夕方に死ぬ理由は？

男 昼間よりはいくらか涼しいし……。

女 涼みたいのはあんただけじゃないの！

駅員 夜じゃだめなんですか？

男 だって野犬が出るかもしれないでしょう？ ここ田舎だし。

駅員 関係ないですよ。死ぬんなら。

男 死のうとしている人間にだって怖いものはあります。

紳士 この辺は狸しか出ないよ。

駅員 だったら明け方がいいですよ。狸は山に帰るし、人もいないし。

紳士 しかしお隣りの山本さんは、明け方ここを散歩してるよ？

駅員 何時頃です？ 始発の前かな。

紳士 さあねえ。とにかく爽やかで気持ちがいいそうさ。

青年 ぼくも時々走ります。とても気持ちいい。

駅員 せっかく気持ちいいところに首吊りを見るのは気の毒ですね。

男 いつどこで死のうが私の勝手じゃありませんか。

女 確かに死ぬのはあなたの勝手だけだね、他人の迷惑になるようなことは慎みなさい。公園は、みんな楽しんで使うものなのよ。

医者 じゃあ商売なんかするなよ。

駅員 ああ、そうだ。(女に) 伝言板、消さないでおきますから、毎日書き直しに来なくてもいいですよ。

女 忘れてた……。 (男に手を差し出す)

男 ……なんでしよう？

女 不幸な話を聞いてあげたから五百円。

男 私……、お金に困って死のうと……。

女 そのロープ、新品じゃない。買ったでしょ。お金がないくせに無駄遣いして。

駅員 いいじゃないですか、どうせ死ぬんですからロープぐらい買ったって。

紳士 そうだな。いくら貧しくても死ぬ時ぐらいは贅沢したっていいよ。

駅員 飛び込みはやめてくださいね。掃除が大変だし、ダイヤ乱すと罰金とりますよ。

男 (怯えて) またお金ですか……。

女 お金じゃなくて、頭を使いなさいって言ってるの。そもそも死のうなんて考えるのは頭を使つてない証拠。頭は使わないとどんどん悪くなるのよ。そして頭が悪いと不幸になるの。あなたみたいだね。だから、はい。五百円ちょうだい。

駅員 それ、お金を使えつて言ってますよね。

女 しょうがないじゃない。頭使わないんだから。

男 ……人生の最後に、こんな残酷な人たちにしか出会えないなんて……私の不幸は筋金入りだ……。 (鼻をすする)

医者 (男に) 今、青っ鼻たらさなかったか？

男 (鼻をすすり) へ？

医者 あんた、蓄膿症だろ。

男 は？

医者 そんな暗いことしか思いつかないのは蓄膿症だよ。鼻つまってるんだろ。(鼻の付根を押さえ) この辺が重苦しくて、いつも頭がぼーっとするだろ？

男 はい？

医者 膿うみがたまってるんだよ。

青年 (いつのまにか体操を再開しながら) 運動しないからです。

医者 ちよつと診てやるから、病院まで来い。(男を立ち上げらせる)

男 保健証持ってません。

医者 (男を引つ張りながら) 気にするな。全額負担すればいいことだ。

男 結局お金なんですか……。

駅員 (樂しげに) 痛いことしますか？

医者 患者次第だな。

男 そんなあ……。

駅員 見学してもかまいませんか？

医者 邪魔すんなよ。

男 人の不幸をなんだと思ってるんだ……。

男、医者に無理やり連れて行かれ、退場。

駅員も、喜々として二人を追いかける。

蝉の声。

紳士 ……私はなにをしに来たんだっけ？

青年 (紳士の真似をして歌う) ♪ミント♪ミント♪

紳士 おお、そうだ。ミントの葉っぱをもらいに行く途中だったんだ。

紳士、再び歌いながら退場。

女と、黙々とストレッチをする青年が残される。

女 ……ねえ。

青年 はい。

女 ……あなたに不幸な話なんて聞いても無駄か……。

青年 不幸な話……。

女 ないでしょ、どうせ。

青年 ……ある。聞きたいですか？

女 聞いたら五百円もらうわよ？

青年 なぜ？

女 そういうシステムなの。

青年 ……あなたは、不幸な話と五百円が欲しい？

女 細かいのはダメよ。お釣りもダメ。五百円玉よ？

青年 (ポケットから五百円玉を出して眺め) これ？

女 (ぐっと集中して) ……それ。

青年 大きなコインですね。

女 そうね。

青年、五百円玉をつまみ上げたり透かしたりしながら、五百円玉を目で追う  
女を不思議そうに眺める。

青年 話、します。

女 うかがいます。

再び、たどたどしいピアノの音。

青年 舞踏会で……

女 舞踏会い？

青年 はい。恋におちたのです。

女 誰と。

青年 とても綺麗な女の人。

女 ……それで？

青年 とても反対された。

女 ……もうちよつと要領よく話せないの？

青年 ぼくの話<sup>はな</sup>し方、よくない？

女 まあ、いいわ。で？ 誰に反対されたの？

青年 マルグリットのパトロン。それから……

女 ちよつと待った。

青年 はい。

女 マルグリット？

青年 彼女の名前。

女 パトロン？

青年 マルグリットの仕事は、男の人にとっても高いお金をもらう……あー、しょう

……娼……娼……

女 娼婦？

青年 そうです。高級娼婦。

女 (毒気を抜かれて) そうなんだ……。

青年 パトロンと別れたら、今度はこっちの父親が反対した。

女 そりゃそうでしょうね。

青年 お金を渡したです。妹の結婚が近かった。変な噂がたつといけない、別れて欲しい。それで彼女は身を引いて死んだ。

女 ……死んだ？

青年 死んだ……。 「やっぱり忘れられない」 って日記が残った。

間。

女、神妙な顔で聞きながらも、そつと手を差し出す。

青年、五百円玉を女に渡す。

女は五百円玉を受け取ると、なにかの儀式のように、慎重に貯金箱に入れる。空の貯金箱に、硬貨の落ちる音。

そこへ婦人が現れ、今度は女の座っているベンチのそばにしゃがみこみ、やはりなにかを拾っている。

女が怪訝そうに眺めていると、婦人と目が合う。

婦人 まあ、先生！

女 はい？

婦人 お久し振りです。まあまあ、なんて偶然なんでしょう。

女 (みるみる顔色が悪くなり) ……小林君のおばあさま……？

婦人 (堰を切ったように) その節は本当にお世話になりました。おかげさまで娘たちもなんとか仲良くやってるようですわ。勝手なものですねえ。仕事に生きるだの別居するだのさんざん大騒ぎして、事がおさまると「ありがとう、お母さん、あとはのんびりしてね」ってこうですもの。甘やかし過ぎたんですね。東京の娘の家と、こっちの家を行ったり来たりしながら、家事やら孫の面倒やらと目の回る忙しさでしたでしょう? 急にのんびりしてなんて言われても、暇をもてあましてしまつて。

女 (逃げ腰で) そうですか……。

婦人 主人も社長の席を譲って会長になったんですよ。まあ会長って言っても、時々会社の様子を見に行くくらいでのんきなものですけど、私が留守にすることが多かったせいか、急にお料理に熱を入れ始めて。でも所詮、男の人のすることでしょう? 材料にお金ばかりかけて後片付けもろくにしてくれないし。かえって私の仕事は増えるばかりなんですけど、「おまえは散歩にでも行つておいで」なんて、台所からも追い出されてしまつて。仕方なくこうして孫のために蟬の抜け殻を集めているんですよ。

女 それはそれは……。

婦人 ところで、先生。こんなところでなにをなさってますの?

女 あの……妹夫婦が隣町に住んでいてですね……夏休みですし、ちよつと遊びに……。

婦人 そうですか。(青年を見て) こちらは?

女 こちらは……今、ちよつとだけお話を……。

婦人 先生、お時間ございます? うちにいらつしやいませんか? ゼリーがたくさんあるんですよ。よろしかったら召し上がってください。

女 いえ、私は……

婦人 私たちみたいな年寄り夫婦では食べ切れないほどたくさんあるんです。少しでも減らしていただけると助かるわ。妹さん、お子さんは? そうよ、お土産に持つていらしたらいいわ。

女 いえいえ、ほんとに……(青年に) あなた、お呼ばれしなさい。あたしはいい

から。

婦人 ……この方、だけ？

女 ……ダメですか、やっぱり……。

婦人 ……ダメっていうわけじゃありませんけど……。

青年 ぼく、トレーニング。

女 ああ、私もトレーニングが……。

婦人 なんの？

女 ……（青年に）なんの？

青年 （肩をすくめて「わからない」というアクション）

婦人 （女の手を取り）ほんとにご遠慮なさないで。学校のお話も伺いたいし。

女 あの、困ります。あの……小林さん……。

婦人 小林はね、娘の嫁ぎ先の名字なんですよ。

婦人、強引に女を連れて行く。

青年、ストレッチを始める。

そこへ若い女が現れ、ベンチに座る。持っていた手提げからおにぎりを出し、食べようとするが、匂いを嗅いでから顔をしかめ、食べるのをあきらめる。傷んでいたらしい。

そんなことは気にもとめず、青年は黙々とストレッチを続けている。

若い女 （あいかわらずの大声で）毎日ここに來てる？

青年 （頷き）トレーニングは毎日のことです。

若い女 最近、若い男の人が來なかつた？

青年 ……お医者さん？

若い女 えー？

青年 お医者さん、病院に帰った。

若い女 耳がよく聞こえないの。ここに書いてくれない？

若い女、持っていた手提げからノートとペンを取り出し、青年に渡す。  
青年、やや躊躇するが、なにか書き込んで女に返す。

若い女 （ノートを見つめ、眉間に皺を寄せ） ……これ、なに語？

青年 フランス語。

若い女 ……日本語、書けないの？

青年 （頷く）

間。

若い女のおながが鳴る。

若い女、おなかを押さえて、ため息をつき、手提げからがま口を出して中を眺め、とぼとぼと退場。

踏切の音。

青年、若い女を見送ってから、来た時と同じように勢いよく両腕を振り、速足で退場。

電車の音。

駅員、腕時計を見ながら大慌てで現れ、百葉箱の戸を開け、大急ぎでメモをとってから退場。

暮れていく公園。

### 3 空腹と指名手配

やがて照明は陽の長い夏の夕方。翌日。

蝉の声。

ピアノの音。ゆっくりと旋律を奏で、同じところで間違える。

傷のついたレコードのように、その繰り返し。

女、登場。ベンチに座り、いつもの準備をすませ、本を開く。

そこへ男が現れる。

男 あのだ……麦茶は？

女 麦茶？

男 あれ……、だって駅に……。違いましたか？

女 なんのこと？

男 ……すみません……なんでもありません……。

男、がっかりした様子でベンチに座る。

女 ？ どうなのよ。

男 ええ……。びっくりするほど膿が出ました……。

女 ……死ぬのやめたの？

男 ああ……。人間なんて悲しいものですねえ……。こんなに絶望してるっていうのに、鼻がすっきりしたただけで、気持ちがちよっと軽くなってしまいました……。

女 よかったじゃない。

男 でも、状況はなにも変わりません。

女 鼻がすっきりしたんでしょ？

男 ええ、それはもう。

女 変わったじゃない。

男 そうなんですけどね……。これからのことを考えると……。

女 だから頭を使いなさいって。グズグズ言うなら五百円もらうわよ。

男 すみません……。でも、頭を使おうにも、こうおながすいては……。

アイスを食べながら、医者が見れる。

医者 (男に) 片方ずつ丁寧に鼻かんでるか？

男 かんでますよ……。

医者 失うものはなにもないみたいなこと言って、あんなに膿ためてちゃん。まあ、しばらく通院だね。それに、受付のおばちゃんよりあんたが掃除してくれた方が、待合室もきれいになるし。

男 (独り言のように) 小銭が落ちてないかと……。

女 雇ってもらったの？

男 治療費の代わりだって言うんですよ。

医者 あれ？ ご不満？ 賄いもつけてやったのに。

男 それは感謝してますけど、先生、「メシご馳走してやる」って言ったじゃないですか。「メシ」って言ったたら、ごはんのことだと思っじゃないですか。そうめんじゃ、すぐおなかがいちやいますよ。

医者 文句言うなら十六束も食うなよ。

男 すみません……。ただ私は、てっきりお米が食べられるものと期待し過ぎてしまつて……。

医者 わかったよ。コメだな？ 明日から、五合炊いといってもらうよ。

男 ……馬鹿にしてるんですね……。たかがメシのことでなんだって思ってるんでしよう。

医者 思ってるけどさ。

男 先生みたいに美味しいものをモリモリ食べて育った人には、私の気持ちなんて、わからないんだ。

医者 食わせてやるって言ってるのに、なんでそんなこと言われなきゃならないんだよ。大体「メシ、メシ」って、それが人生に絶望してる人間の態度か！

湯飲みを乗せたお盆とヤカンを手に、駅員が登場。

駅員 遅くなっちゃって。

女 なによ？

駅員 伝言板に「麦茶のサービスあり」って書き足したんです。

男 それ、いただいても？

駅員 (少し迷って) 全部飲んじゃダメですよ? 昨日のあれ、すごかったですね。私、蓄膿って初めて見ましたよ。あなたもまあ、大して痛くもないくせに大袈裟に騒いじゃって……。

男 痛かったですよ! 先生の治療は乱暴なんです。

医者 あんたが暴れるからだ!

駅員 とにかく、最後まで見られなくて残念でした。

男 (麦茶をすすりながら) そんなに人の不幸が面白いですか。

駅員 ええ。

男 「ええ」って……。

駅員 だって、(女に) ねえ?

女 いっしょにしないでよ。

医者 趣味が悪いよ。あんたたちは。

女 いっしょにしないでってば。

男 対岸の火事は美しいって言いますからね……。

駅員 いやあ、火事はやっぱり火の粉が降りかかりそうな近さで見ないと。

医者 ……変わってるな。

駅員 そうかなあ。人の不幸で小銭を稼ぐ方が変わってませんか?

女、突然、男の頬を勢いよく叩く。

男 (駅員を指し、女に) ぶっんならあの人でしょう!

女 蚊がとまっていたのよ。

男 (医者に鼻を広げて見せ) 鼻血が……。

医者 出てないよ。

駅員 仕留めました?

女 (空中を探しながら) 逃がした。

男 叩かれ損じゃないですか……。

女 いた! (百葉箱を思い切り叩く)

駅員 やめてください。

女 見てよ、ほら、こんなに大きい……（さらに狙いをつけて）  
駅員 やめろってば！

駅員、蚊を狙う女の手を払いのける。気圧される女。

間。

蝉の音が響き渡る。

女 ……見失った……。

医者 外なんだからきりがないぞ。

駅員 蚊取り線香を持ってきますから。もう触らないでください。

女 壊しやしないのに……。

駅員 壊す人に限ってそう言うんです。（百葉箱の戸を開け、中を確認する）……

あれ？

女 壊れてないって。

駅員 （中からおにぎりを取り出し）なんだ？ これ。

男 （目を見張り）おにぎりじゃないですか……。

駅員 時々いるんですよ。ここにゴミとか猫を捨てていたりする人が。

男 それ、ゴミ箱なんですか？

女 百葉箱じゃない。

男 ひやくようばこ？

駅員 温度計が入ってるんですよ。

医者 小学校で習っただろ。

男 小学校のことは忘れるようにしてるんです。いじめられてばかりいましたから。

女 どんないじめにあった？

男 そうですね……上履きを隠されたり……（ハツとして）その手にはのりません

よ。また五百円で言うんでしょう。

女 （残念そうに）頭を使うようになったわね。

駅員 どうしましょうか、これ。

医者 捨てるよ。

男 捨てるならください！

女 食べる気？

男 食べるものでしょう？ おにぎりは。（駅員からおにぎりを奪い取り）ああ…

…、米つぶだ……。 （ラップを剥し始める）

駅員 まだ捨てるって決めたわけじゃないのに。

女 あんたも食べる気？

男 半分コにしますか？

駅員 いいですよ。今、おなかへってないから。

医者 腹がへってたら食うのかよ。

駅員 （男に）毒は入ってませんか？

男 （おにぎりを割って）梅干しが入ってます。

駅員 だったら食べますよ。おなかへってればね。

女 食あたりするかもよ。

駅員 ひもじい思いをするよりましです。

男 そうですよ。（食べようとする）

医者 やめとけて！

男 米が食べたいんです！（食らいつく）

医者 なにかあっても首から下は診ないからな。

男 先生も同じ日本人じゃないですか。この気持ち、わからないかなあ。

医者 わからん。

駅員 ま、美味しいものをモリモリ食べて、なに不自由なく育った人には、わからないかもしれないかもね。

みんなの視線がなんとなくアイスを食べている医者に集まる。

医者 なんだよ、さつきからモリモリモリモリつて。

青年、ウォーキングで登場。

青年 (医者を見るなり) あ、アイスクリーム。

医者 (カチンときて) わかったよ！ いいか、待ってるよ。ここ動くなよ！

医者、退場。

青年、時計を確認し、体操を始める。

青年 (なにかを思い出し) あ！

女 なによ。

青年 昨日、彼を探してる人がいた。

駅員 どんな人です？

青年 声がとても大きい。

男 若い女の人じゃありません？

女 (ふと、駅の方を見て) あ！

駅員 お客さん？

女 (急いで荷物をまとめ) 女の人が探してたんでしょ？ あたしが伝えてきてあげる。それじゃ。

女、慌てて退場。

入れ替わりに、婦人が現れる。

婦人 (男に) あら、よくお会いしますわね。(辺りを見回してから青年に) 今日きょう

は先生は？

青年 行ってしまった。

婦人 どこへ？

男 病院に帰ったんですかねえ。

婦人 小宮先生、どこかお悪いの？

駅員 須崎先生でしょ？

婦人 須崎？ それはこの先の耳鼻科の先生でしょ？ 小宮先生よ。（青年に）あ  
なた昨日、ご一緒だったじゃない。

青年 コミヤが彼女の名前？

婦人 お知り合いじゃないの？

駅員 あの人、先生なんですか？

婦人 小学校のね。去年、孫の担任だったの。

若い女が現れ、真っ直ぐ百葉箱に向かい、扉を開ける。

駅員 なんですか？

若い女 （大声で）おにぎりがない！

駅員 あなたが犯人か……。

青年、「おにぎりをここに入れたの？」と、身振りて若い女に尋ねる。

若い女 だってここなら腐らないと思っただもん！

駅員 食料庫じゃないんですよ、これは。

若い女 誰がとったのよ！（一人一人の匂いを嗅ぎ出し、男に）あんたね！

男 違います！

若い女 すっぱい匂いがするもの！

男 これは風呂に入っていないからで、梅干しの匂いじゃありません！

駅員 それ言ったらバレちゃうじゃないですか。

若い女 （男につかみかかり）返してよ！

男 すみません！ もう返せません！

婦人 まあ、かわいそうに。おなかですいてるのね？ ちょっと待って。（バッグ  
の中を見て）蟬の抜け殻しか入っていない……。

駅員 (若い女に) まあまあ、麦茶でもいかがですか。

若い女 (湯飲みを受け取り、麦茶を飲む)

駅員 あなたもいけないですよ。こんなところに食べ物を置いていくから。

若い女 (飲み干して再び男につかみかかり) 返してよ！ あたしの晩御飯！

男 すみませんって言ってるのに！

青年 あ！(若い女に、医者が戻ってきたことを知らせる)

医者、買い物袋をさげて戻ってくる。

続いて女、同じ荷物を持たされている。

さらに続いて紳士。

駅員 なにやってたんですか。

女 無理やり買物につきあわされたのよ。

医者 (乱暴に袋の中身を取り出し) ほら、アイスだよ！

婦人 (紳士に) あら、お父さん。

女 え！

紳士 牛乳買ってきたよ。なんだ、また蟬の抜け殻か？

男 ご夫婦なんですか？

婦人 先生とご一緒だったの？

紳士 誰？

婦人 やだ、(女に) 主人です。お父さん、郁ちゃんいぐの担任だった小宮先生よ。ほら、昨日、うちにお連れしようとしたのにご遠慮なさって。

紳士 ああ、孫がお世話になりました。ミントゼリーはお嫌いでしたか？

女 いえいえ、そういうわけでは……。

医者 (一人一人にアイスを押しつけながら) 俺のおごりだ！ 好きなだけモリモリ食え！ 全部食えよ！ そして二度と食い物のことでケチをつけるな！

男 いただきます。

婦人 まあ、私たちまで？

駅員 (アイスが大量にあることを確認し) 私、伝言板に「アイスもサービス中」  
って書き足してきました。(急いで退場)

医者 (アイスを若い女に渡し) ……あんた誰だ?

男 お待ち兼ねですよ。

男、若い女を見るが、彼女は医者にもくれず、すごい勢いでアイスを食べ  
ている。

青年 (若い女の肩をたたいて、医者を目指し) 若い男の人。

若い女 (不審そうに医者を見て) ……違う。

男 なんだ、違っただんですか。

若い女 (食べながら) もっといい男。

医者 アイス返せ。

若い女 もっと背が高くて、もっと痩せてて、もっと優しい顔してる。

医者 食った分、全部返せ!

紳士 その人がどうしたんだい?

男 探してるみたいですよ。ここ何日も。

婦人 お見かけしないわ。そんなハンサムさん。

女 (若い女に) あなた、その人のなんなの?

男 恋人でしょう?

若い女 ……。(なにを訊かれているかわからず、しかめ面)

青年 彼女は耳がよく聞こえない。

婦人 まあ、お気の毒に。

医者 (なにか言いたげに若い女を見て) ……。

そこへ駅員が戻ってくる。

駅員 (ブツブツと) まったく…誰の仕業だ?

男 どうかしました？

駅員 駅のポスターが剥がされてたんですよ。

紳士 まさか花火大会のじゃないだろうね。(みんなに)うちが主催なんだよ。ポスターにも大きく会社の名前が載ってるんだ。(若い女に)花火だよ。は・な・び・た・い・か・い!

若い女 ……さきおととい、雨でなくなった……。

紳士 四日後にちゃんとやるよ。(指折り数えて)あした、あさって、しあさって……、お母さん、その次はなんて言うんだっけ？

婦人 やのあさってじゃなあい？

男 それはあさっての次の日でしょう？

婦人 あさっての次の日はしあさってよ？

男 うちの方ではあした、あさって、やのあさってって言うなあ。

婦人 まあ、お国はどちら？

駅員 (無視して)指名手配のポスターなんですけどね。

紳士 なーんだ、よかった。

駅員 よくないですよ。

婦人 犯人の顔がハンサムだったんじゃないの？

駅員 まあ、ハンサムと言えばハンサムでしたけど。

男 じゃあ、結婚詐欺？

駅員 爆弾犯ですよ。ほら、この間、ゴルフ場建設予定地で爆発騒ぎがあったですよ？

紳士 ああ、隣町でな。

婦人 ゴルフが嫌いなのかしら。ハンサムなのに。

駅員 嫌いなのは自然破壊のようですね。これまでも造成地やダム工事の現場が標的になっています。

婦人 怖いわねえ。

駅員 元は花火職人だそうですから、火薬に不自由はしないでしようね。ゴルフ場の時には自分も怪我したみたいですけど、まだまだやりますよきっと。

青年 テロはいけない。

男 ポスターが剥がされたってことは、仲間がいるんじゃないですか？

駅員 困っちゃうよなあ……。 (若い女に) 先生に会えて、おにぎりの怒りが治まりました？

男 余計なこと言わないでください。

女 人違いだったみたいよ。

医者 (若い女に) なあ、あんたその男の……

駅員 男？ 彼氏？ フラれたんですか？

婦人 ダメよ、お耳が不自由なんですって。

駅員 そうなんですか……。じゃあ、こつち見ててください。 (一人二役で) 「あ

なた、行かないで」 「うざったいんだよ！ このアマ！」 (殴る動作) 「あれ

え」……感じ出ないな。 (男に) あなた、ちょっと。

男 (はりきって) はい！

男と駅員、双方とも恋人に足蹴にされる女性をジェスチャーで伝えようとする。

男 (セクシーなポーズを取って見せてから) おいといて。

女 わかんないわよ。

紳士 ああ、ダメダメ。悲しんでる女性はね、もつとこうだよ。 (ジェスチャーに

参加する)

婦人 お父さん、やめてちょうだい。変に上手で恥ずかしいわ。

駅員 誰か男役やってくださいよ。

医者 いい加減にしてくれ、気持ち悪い。 (若い女を指し) 第一、本人が見てないぞ。

若い女 (女に) この人たち、なにやってるの？

女 あなたがその男にふられたのかどうかって。不幸な話なら聞いわよ。五百円で。五百円って言っても五百円玉ね。

青年 (わかっていない様子の若い女に、動作をつけて) 紙とペンは？

若い女 ……。 (ノートとペンを出す)

女 じゃあ、あたしが言うこと書き取って。 (ノートとペンを青年に渡す)

若い女 その人、字、書けないよ。

女 (びっくり) 嘘でしょう？

若い女 フランス語なら書けるみたいだけど。

紳士 君、フランス人？

婦人 日本語、お上手ねえ。

青年 ぼくは日本人です。小学校に入っすぐフランスに行っただです。日本に帰っ

てきたばかり。聞く、話すは大丈夫。ひらがな読める。書くは苦手。

駅員 話すのも苦手って言っと言った方がいいですよ。

女 ちよつとこれ、読んでみなさい。 (青年に自分の本を見せる)

青年 漢字、ある？

女 少ししかないわよ、童話なんだから、

医者 (若い女に) まるつきり聞こえないのか？ いつからだ？

男 先生、書いてあげないと。

青年、「アリたちが……のあいだ……そこへ、キリ……ギリスの……。」と、  
たどたどしく細切れに朗読。イライラと聞いている女。興味深そうに聞いている駅員。

一方、若い女は、筆談で向けられる医者の質問に、頷いたり、首を振ったり、黙ったり。そのまわりでは婦人、紳士、男がなにかと口をはさむ。

ミンミン、ジージー、オーシンツクツクと、様々な蝉の声。

割れんばかりの大合唱に、人々の声が聞こえないほど。

医者 なんだよ、治したくないのか？

男 なんとか言った方がいいですよ。この先生、気が短いから。

若い女 (男に) おにぎり返して。

紳士 君、おなかすいてるんじゃないの？ 今夜、うちはグラタンだよ、よかったらいらっしやい。

男 そうですか……。グラタンですか……。

医者 病院まで来いって！ 診てやるから。

男 きつとお金がないんですよ。（若い女に）大丈夫だよ、掃除をすればね……

医者 金なんていいから来い！（若い女を引っ張って行く）

男 （残ったアイスを集めながらも追いすがるように）ずるい先生、私の治療費も……！

紳士 遠慮することないんだよ。（ついていく）

婦人 ちよつと、ご迷惑よ、お父さん！（と追いかける）

医者と若い女に続いて男と紳士、さらに続いて婦人、退場。

この時、若い女の持っていたノートの間から、一枚の紙が落ちる。

女 半分しか読めないじゃない！

駅員 それもあてずっぽうで読んでませんか？

青年 この話、知ってる。「アリとキリギリス」ね。

女 カンで読んでちゃ意味ないでしょ！ 書く方は？

青年 少しできる。

駅員 ウソだ。

青年 （地面に文字を書き）……はい。

女 （見て）……なによ、これ。

青年 （指でさしながら）う・そ。

女 ……。 （地面に文字を書く）

青年 （女の書いた文字を見て）あれえ？

女 「うそ」はこう。あなたが書いたのは、「う・ふ」。

駅員 やっぱりね。

青年 「そ」と「ふ」、くねくねして似てるね。

女 似てない！ ちょっと冗談じゃないわよ、その程度なの？ 五十音もろくにわ  
からないんじゃないじゃまず書き方から……（辺りを見回し）あれ？ ノートとペン  
は？

駅員 彼女が持ってたちゃいましたよ。

女 あんたも持ってるでしょ？

駅員 これは温度を記録するノートだからダメです。

女 いいじゃないの、減るもんじゃなし。

駅員 減りますよ、紙もインクも。

女 ケチ！

駅員 駅の反対側に文房具屋さんがあります。

女 （忌ま忌ましそうに駅員を睨んでから青年に）ほら、行くわよ！

女、青年を連れて退場。

ぼつんと残される駅員。

駅員 （腕時計を確認し）もう閉まってるはずですけどね。

ピアノの音。

駅員、百葉箱の戸を開け、メモをとる。

湯呑を片づけようとしたところで、若い女が落としていった紙に気づき、拾  
いあげて広げる。それは指名手配のポスター。

駅員 ……あつた………。

同じフレーズを繰り返していたピアノが、耐え兼ねたようにめちやくちやに  
叩かれる音。

重なるように踏切の音。

駅員、お盆とヤカンを持って退場。

暮れていく公園。

#### 4 爆弾と書き取り教室

照明は陽の長い夏の夕方。翌日。

蝉の声。

ピアノの音はやけくそ気味に奏でられる「猫ふんじやった」。

青年がいつもの調子でウォーキングをしながら通り過ぎる。

それを追うようにやや遅れて女が「待ちなさい！」という声と共に、息も切れ切れに現れる。

女 いつに、なったら……始めるのよ！

女、東屋の前でへたりこむ。

その前を若い女が物凄いスピードで走り去る。

それを追うように駅員が「こら！ 待て！」という声と共に現れるが、女に  
つまずいて転ぶ。

女 どこ見てんのよ！

駅員 邪魔しないでくださいよ！ あーあ、逃がしちやった。

女 なによ、キセル？

駅員 ポスター剥したの、彼女だったんですよ。

男が医者の腕をつかみ、なにやらもめながら登場。

医者 あんたが邪魔するから、あいつ逃げちやったじゃないか！

男 先生が話をちゃんと聞いてくれないから……。

医者 （若い女の去った方を気にしながら）毎日治療した方が治りは早いんだって。  
男 いいじゃないですか。病院に来ないってことは治す気がないんですよ。それよりも私の……

医者 水虫を診てほしけりや皮膚科へ行け！ 金もないくせに凶々しいぞ。

男 毎日ちゃんと病院のお掃除してるのに。

医者 毎日ちゃんとメシも食ってるだろう。とにかく俺はもう帰るんだ！

男 私だって……。

医者 ……そう言えば、どこに寝泊まりしてるんだ？

男 駅の向こうの公園です。あそこはトイレも水道もあるし。

医者 野宿なんかしてるから水虫になるんだよ。夏のアウトドアを楽しんでる場合

じゃないだろ？ とつとつ仕事探せよ。

男 先生がしばらく通院しろって言ったんですよ？

医者 （駅員と女に気づき）なにやってんだ？

駅員 （ポスターを見せて）これを剥そうとしてたんで。

男 （女を見てひるみ）あなたが爆弾犯のお仲間？

女 今、逃げてったでしょ！

男 ええ！ 彼女が？

駅員 この犯人が例の彼なのかなあ。

医者 ……違うだろ。

駅員 どうして？

医者 俺の方がいい男だ。

女 そーお？

男 （ポスターを見て）先生より痩せてるし、優しそうですよ。背も高い。

医者 あんたはもう治療に来なくていい。

女 やっぱりこの人なんじゃないの？

駅員 どういう関係なんでしょうね。

男 いずれにしても、犯人が近くにいるってことでしょうか？

駅員 少なくとも、隣町では爆弾を仕掛けてる……。

蝉の声。

医者 「自然破壊反対」のテロリストだろ？ ここには建築現場も造成地もねえじやねえか。

駅員 でも、彼女がこの辺りを探し回ってるってことは……

男 (鋭く) シッ！

女 ……なに……。

男、人差し指を立てたまま、ゆつくりと辺りの様子に聞き耳を立てる。

蝉の声。

男が再び、「シッ！」と制すると、蝉の声、やむ。

男、忍び足で百葉箱に近づき、耳を押しつけると、顔色を変えて後ずさる。

男 ……時限爆弾が仕掛けられてる……。

女 うそ！

男 間違いありません！ チツチツチツって音が。

医者 気のせいだろ？

男 ほんとですよ！ 自分でお確かめになったら！

医者 やだよ！

駅員 どうしてよりによって百葉箱に……。

男 彼女だ！ さっき凄い勢いで逃げたし、昨日もおにぎりを隠してた！

医者 にぎりめしと爆弾を一緒にするなよ。

男 かやくごはんってあるじゃないですか！

医者 ごはんのことは忘れる！

男 忘れられません！

女 そんなことより警察！

駅員 (行きかけて) でも、もし警察が来る前に爆発したら、百葉箱は？

女 いいから警察！

男 とにかくここから逃げましょう！

駅員 百葉箱を置いて？

医者 そんなにあの箱が大事なら、二四時間見張ってるよ。

女 もういい！ あたしが連絡してくる！

女が駅の方へ向かおうとしたところ、青年が腕時計を見ながらウォーキングで戻ってくる。

青年 書き取りのレッスン、始めましょう。

青年、軽く体操をしながら百葉箱に向かい、扉を開ける。

一同が「あっ！」と声を上げる。

青年、百葉箱の中から、ノートと筆記用具を取り出す。

女 ……爆弾は……？

青年 「ばくだん」。 (ノートを広げ) ひらがなでいい？

医者と駅員、百葉箱に駆け寄り、中を覗く。

医者 (男に) 人騒がせもいかげんにしろ！

駅員 そうだ。時計が入ってるんだった。

医者 おまえも毎日観察してるならすぐに気がつけ！

青年 トレーニングの時、荷物置ける。その箱とても便利。

駅員 そういう時は駅の手荷物預かりを利用してください。

男 (バツが悪そうに) よかったじゃないですか、大事に至らなくて。

医者 どうして仕事帰りに毎日こんな大汗かかなきゃならないんだ！

女 夏だから！ 授業の邪魔だから騒ぐだけなら帰って。

医者 言われなくても帰るんだよ！

青年 騒ぐの大丈夫。ぼく Concentration、自信あります。

駅員 こんにちはらしおん？

医者 集中力だろ。

男 (女に) 新しいご商売ですか？

女 これはボランテイヤ。

青年 書き取り、教えてくれます。

医者 書き取りでも蝉捕りでも、せいぜいがんばってくれ。

医者が帰ろうとしたところ、両脇を紳士と婦人に抱えられた若い女が現れる。

紳士 もう逃がさないよ。どうして昨日いなくなっちゃったんだい？ グラタン、

美味しくできたのに。

婦人 ごめんなさいね。主人は言い出したら聞かないのよ。

紳士 今日もおなかすいてるかな？ 今夜は爆弾ハンバーグだよ。まんまるでカリ

ッとするんだ。

婦人 普通の揚げ団子なのよ。

紳士 お肉は好きかい？

婦人 お父さん、この方、お耳が……。

紳士 そうか……。でもお肉は好きだよねえ、若いんだもの。

駅員 捕まえたんですね。

紳士 お肉屋さんの前でフラフラしてるところを偶然ね。

男 お手柄ですよ。

医者 なんで治療に来ない！

婦人 あら、病院に行かなかったの？ ダメじゃない。

男 そんなことより警察に……。

紳士 なんだ、病院に行かないのは犯罪かい？

駅員 指名手配のポスターを剥そうとしたんです。

紳士 花火大会のポスターじゃなきやかまわないよ。

駅員 勝手なこと言うと花火大会のポスター剥しますよ。

紳士 (若い女から手を離し) なにい? 営業妨害で訴えるぞ!

女 (若い女にポスターをつきつけ) 探してるのはこの男?

若い女 ……。

女 (青年に) 「探してる男、はてな」って書いて。ひらがなでいいから。

青年 (書く) さ、が、し、て、る……

女 ……それは「る」じゃなくて「ろ」。……「はてな」はマークでいいの! ク

エスチョンマーク!

駅員 事情聴取と書き取りの練習を兼ねるのはどうかと思うなあ。

青年、書き上がったノートを若い女に見せる。

長い沈黙の後、若い女、頷く。

男 重要参考人ですよ。警察に知らせなきや。

若い女 悪い人じゃない!

駅員 爆弾犯なのに?

青年、「てろはいけない」と書いて若い女に見せる。

紳士 (ノートを見て) そうだな。テロはいけないよ。

若い女 ……だけど、こんなことでもしなきや、なんの力もない人間の言うことなんて誰も見向きもしてくれない。

男 危険思想だ。やっぱり警察に。

若い女 この近くでもしあの人を見つけたら、あたしに教えてください! 必ず自首させるから、警察には言わないで! お願いします、お願い!

駅員 お願いされてもねえ。

女 (青年に) 「この近くにいてどうしてわかるのか」って書いて。

青年 (書こうとするが) 長い。

女 じゃ「ちかくにいるのか」。

紳士 (ジェスチャーを始め) この近くにね、いるの？

医者 (身振りを交えて) 耳！ まだよくなるかい？

駅員 どんな病気なんです？

医者 難聴だと思うけど。

紳士 (ジェスチャーで) 難聴なの？

婦人 お父さん、授業のお邪魔よ。(医者に) 治りそうですか？

医者 精神的なことが原因だと少し厄介だな。

若い女 (ノートを見て) いるはず……。

駅員 いるんだ……。

男 どこ？ 今度はどこを爆破するんです？

若い女 約束したから……。ここでいっしょに、花火を見ようって。

駅員 爆発じゃなくて？

若い女 (医者に) 一週間も延びるなんて思わなかったから、もうお金がない。

医者 金はいって言うてるだろ！

男 鼻屑ですよ！

医者 うるさい！

婦人 (若い女に) あなた、その人の恋人ね？

紳士 どうしてわかるんだ？

婦人 ロマンチックなもの。二人で花火を見る約束なんて。

駅員と男、それぞれ小指や親指を立てて、「彼氏？」「彼女？」と若い女に

詰め寄る。

医者 (駅員と男を払いのけ、若い女の腕をつかみ) 来い！

若い女 警察には……！

医者 病院だよ！ おまえはまず治療を受けるべきだ。耳が治らなきゃ男の声がし

てもわからないだろ。

若い女 ……。(不安そうに一同を見渡し)

医者 誰も通報なんてしないよ！

駅員 あー、勝手に決めちゃって。

医者 さつさと来い！ 時間外なんだぞ。(若い女を連れて退場)

紳士 あれ？ また逃げられちゃったよ。

婦人 もっと詳しく伺いたかったのに。

男 いい考えがありますよ。(夫妻に) お宅で彼女を預かるんです。通報はしないまでも、我々で見張り続けるんですよ。

紳士 我々って誰だ？

男 我々って言ったら……、我々じゃないですか。

婦人 あなたのこともお預かりするの？

男 お二人だけでは心細いでしょう？ あんなしおらしいことを言っていましたけど、いつ爆弾犯と接触するかわかりませんからね。

駅員 あなたが爆弾ハンバグと接触したいだけでしょう？

男 (凶星)

婦人 ……ちよつと相談させてくださる？(紳士に手招きしながら) お父さん。

紳士と婦人、男のそばからやや離れる。

男は祈りを捧げるようなポーズ。

駅員 (男を指し、女に) 確かおととい、死のうとしてた人ですよね。

女 (青年に) 「死のうとした人」って書いて。

婦人 あのお嬢さんに来ていただくのは全然かまわないけど……。

紳士 ずいぶん気にいってるんだな。

婦人 だって、お金もないのに不自由な耳でお尋ね者の恋人を探してるのよ？ 少

女小説みたいじゃない……。

紳士 彼の経歴だって三面記事みたいだよ？

女 (青年のノートを見て) 漢字も書けるんじゃない。

駅員 「人」。(という字を空中に指で書きながら) ひらがなより簡単ですからね。

婦人 どういう方なの？

紳士 そうだなあ。簡単に言えば、気の毒な人かなあ。

婦人 気の毒ねえ……。

青年 (書きながら) 簡単、簡単。(男にも得意気にノートを見せる)

婦人と紳士がおもむろに男の方を振り返ると、男はノートを手にし、「しのーとした人」「きのどくな人」と書かれたページを見せている。

紳士 ちょうどいいじゃないか。郁ちゃんたちが来ると思って、買いこんじやった

お菓子もいっぱいあるし。

婦人 (男に) ……甘いものは好き？

男 大好きです！

紳士 決まりだよ。

男、思わずウイニングポーズ。

駅員 見張りに行くんですからね？

男 そうと決まれば、彼女を連れに行きましょう！

婦人 私、先に帰ってお部屋の準備をしておくわ。それじゃ小宮先生、また。

紳士 ひき肉！ 忘れずに冷蔵庫だぞ！

婦人、男と紳士、それぞれの方向に退場。

駅員 面白くなってきたな。

女 指名手配の恋人ねえ……。

駅員 五百円玉の匂いがしますね。

女 あなたからもね。

駅員 私？

女 百葉箱にあんなに執着するのはなぜ？ なにか不幸な思い出があるんじゃないの？

青年 書き取り、しますか？

女 できるなら。

駅員 逆ですよ。

女 逆？

駅員 あの箱があれば、とりあえず自分の居場所ができるんです。

女 ……意味がわからない。

駅員 わからないんですよ。美味しいものをモリモリ食べて育った人には。

青年 書き取り、できませんでした。

女 今日はもうおしまいにしましょう。また明日。

青年 (片付けながら) A demainね。

駅員 あどうまん？

青年 また明日。Merci コシヤ。A demain. (退場)

女 呼び捨てにするな！

駅員 ちゃんと書けるようになるんですか？ あの調子で。

女 帰したわよ。

駅員 はい？

女 誰もいない方が話しやすいでしょ？

駅員 しつこいんですね。

女 (貯金箱を手にして) 熱心と言って。

駅員 (やれやれといった様子でため息をついて) ……父親は、気が短くて乱暴な男でした……。

女 (身を乗り出す)

駅員 朝だろうが、夜だろうが、なにかにつけて暴力をふるった。殴られなかった日なんて一日もありませんでした。

女 それで？

駅員 二十歳で結婚したんです。

女 (驚き) そうなの？

駅員 でも子どもが生まれた頃から、相手は暴力をふるいだした。

女 (さらに驚き) 子どもいるの？

駅員 三年我慢して、逃げるように離婚しました。怯えて暮らすのは二度と御免だと思つて、今度は虫も殺せそうにない人と再婚したんです。ところがこの男がまたひどい酒乱だった。

女 ……男？

駅員 そのうち男は、酔つてない時でも彼女を殴るようになった。挙句の果てには、彼女の子どもにも手をあげるようになった。

女 ちよつと待った……。

駅員 おんなじことの繰り返しですよ。それで彼女はどうしたと思います？

女 ……どうつて……。

駅員 子どもを殴るようになったんです。

蝉の声。

駅員 (腕時計を見て) あ、時間だ。(と百葉箱に向かう)

女 誰の話よ！

駅員 私に夫や子どもがいるわけないじゃないですか。

女 デタラメ？

駅員 (観察記録をつけながら) 違いますよ。あなたがあんまりしつこいから、知り合いの話をしたんです。

女 五百円は？

駅員 あなたの不幸な話を聞きます、でしょ？

女 (ものすごく悔しい) 本人から聞いわ。紹介しなさい。

駅員 (扉を閉め) 死んじやいました。

女 ……あなたは絶対不幸な人よ。根性ねじ曲がってる。

駅員 電車が来るので失礼します。また明日。あどうまん、コミヤ。(去る)  
女 呼び捨てにするな！

踏切の音。

電車の音。

女、乱暴に荷物を片付けると、怒りもあらわに大股で退場。

暮れていく公園。

## 5 椿姫と百葉箱

照明は陽の長い夏の夕方。翌日。

蝉の声。

ヤカンと蚊取り線香を持った駅員と、貯金箱などの荷物を持った女が現れる。

女 強情はらないで話してごらんなさいって。

駅員 私なんかにかまってないで。書き取り教室はどうしたんです？

女 ちよつと休憩とか言って走りに行っちゃったのよ。

駅員 それで休憩になるのかなあ。

うんざり顔の医者、続いて男と婦人と、心ここにあらずといった表情の若い女が登場。

婦人 あの原田さんておばあさん、ほんとに面白い方ねえ。とつてもお元気そうだし。  
し。

男 でも、須崎医院の他に、眼科と皮膚科と接骨医院に通ってるそうです。

医者 あのばあさんはしゃべりに来るだけで、健康そのものだよ！

男 治療費とつてるくせに。

医者 あれは場所代だ。

駅員 (女に) あなたも病院を開いたらどうです？

医者 とにかく、あんたたちまで用もないのに病院の中をうろちよろしないでくれ。

男 用はちゃんとありますよ。(若い女を鋭い目で睨む)

婦人 (女に) こんにちは。あら？ 書き取り教室は？

駅員 今は本業に精を出しているところですよね。

女 余計なこと言わない！

婦人 本業って？

医者 あれ？ ご存じないんですか？ この方のご商売を。

男 人の不幸な話を聞いて、五百円玉をふんだくるんですよ。

婦人 ……悩み相談をなさってるってこと？

駅員 そんな聞こえのいいものじゃありませんね。

女 違うんです、小林さん。これはですね……。

婦人 小林は娘の嫁ぎ先の名字なんですよ。ちよつと待ってくださいね。……つま

り……不幸な話を聞いて、その代金として五百円をもらうのね？

男 五百円もです！

婦人 それは立派なボランティアじゃないですか。

男 お金をとるんですよ？

婦人 お金を払えば、話す方は卑屈ほうにならずにすむわ。

女 ……そう言っていただけと……。

ふと我に返って彼らのやりとりを怪訝そうな顔つきで窺う若い女。

それを見てとった医者はノートに書いて説明してやる。

そこへ青年がウォーキングで戻ってくる。

青年 はい、休憩終わり。(時計を見て走り終え、体操をする)

婦人 ああ、よかったわ、お会いできて。先生、私、例題考えてきたんですよ。

女 ……はい？

婦人 ほら、書き取りの。「あ」がいっぱい入ってる文章なんです。（メモを取り出し）「あした、あめが、あがったあとで、あえたら、あおう」。この「あえたら」ってところ、気が利いてるでしょう？

女 ええ、ほんとに……。 （青年に）ほら、せつかくだから、書き取って！

青年 （地べたで開脚などをしながら書き取る）あした……あめが……。

男 「アマゾンのあきんどは赤ら顔」なんてどうです？

婦人 ……意味がわからなくない？

駅員 「あのこにあげなかったあまいアメだま」は？

医者 なんであげないんだよ。

青年 あ……えたら……あめ……だ……ま。

女 混ぜってるわよ、文章が。

婦人 （若い女に）ミキちゃんもなにか考えてみたら？（メモを見せ）ほら、

「あ」のつく文よ。「あ」。

若い女 ……あんなに愛しあったのに。

一同、沈黙。

なんとなく気まずい間。

一人、青年だけが、「あ……ん……な……に……」と、無心に書き取りを続ける。

婦人 （場を取り繕うように）今日はピアノの音がしないわね。

男 ああ、あの子だったら、今朝方、治療に来てましたよ。発表会の前だつていうのに指を怪我して、思うように練習ができなくて、イライラが高じた勢いで鼻に豆をつめたら、ふやけて出てこなくなったって。（医者に）ね？

医者 言うな！ そういうことを！

駅員 彼女も耳に豆がつまってるんじゃないですか？

医者 豆なんかつまってない。音響外傷による難聴だ。

駅員 音響外傷？

婦人 大きい音を聞いたんですって。でも詳しいことは話してくれないのよ。

医者 人には言いたくないことだってあるだろ。

青年 (書き取りを続けながら) すぐ治る。

一同の視線が青年へ集まる。

青年 大きい音、とてもびっくりする。気持ち、落ち着けて、ビタミンとる。そうすれば治ります。

医者 詳しいな。あんた踊れる耳鼻科医か？

青年 ぼく、それで治りました。

駅員 耳が聞こえなかったんですか？

婦人 なんの音を聞いたの？

青年 La bombe……爆弾です。ぼく、フランスでテロに遇ったです。

男 ああ、去年のあれ？

婦人 ニュースで見たわ。大勢亡くなって。

駅員 確か、日本人も二人、死にましたよね。

青年 (手を休めず) ぼくのお父さんとお母さんです。

間。

青年 (淡々と) 一緒に帰ってきました。この町にお墓があります。

しんみりとした同情のムードが漂う。

婦人 ……私もね、早くに両親を亡くしたのよ。お舅さんたちはすごく長生きしたんだけど。

男 私も高校を卒業する時、父が借金だけを残して……。

医者 借金を抱え込むのは遺伝か？

駅員 生きてりやいいってもんでもないでしょ。暴力的な親だったりしたら、こつちが死ぬことだってあるし。

男 そんなの家を出ればいいことじゃないですか。借金取りは追いかけてくるんですよ？

婦人 でもそういうことは警察に頼めばなんとかなるでしょう？ 年寄りの介護となると、そうそう助けも借りられないわ。

男 いや、お言葉ですけどね……

それぞれ自分の苦労話に熱中。青年は書きとりに集中。

若い女 (女に) みんな、なんで盛り上がってるの？

女 自分がどれだけ不幸かを競ってるのよ。

若い女 ？

女 (ノートに書いて、女に見せる)

若い女 (読んで) 五百円、もらわなくていいの？

女 あれは不幸話じゃなくて自慢話なもの。

若い女 ？

女、書こうとしたが面倒になり、やめる。

若い女 ……話を聞いてほしい人、たくさん来た？

女 (首をふり) 全然。

若い女 ふーん……。

女 (口を大きくゆっくり動かし、身振りを交えて) 話す気になった？ (バカらしくなり、普通の調子に戻して) それとも誰か紹介してくれるの？

若い女 ……あの人は、話したがってた……。

女 え？

みんなも若い女の話に注意を向ける。

若い女　そういう商売があるといいなって言ってた。知らない人にお金を払って聞いてもらうなら、気が楽だろうなって……。話なんかあたしがいくらでも聞いてあげるって言ったのに、自分のことは全部一人で抱え込んで……。優しい人だから、人に悲しい気持ちを分けられないんだよね。

女　そんな優しい人が、どうしてテロリストなんかになるわけ？（ノートに書き、若い女に見せる）

若い女　おばあちゃんの遺志を継いだんだよ。

駅員　おばあちゃんもテロリストだったんですか？

若い女　自然保護の運動にすごく熱心な人だった。署名運動とかビラ配りなんかも先頭に立って頑張ってた。八十超えても元氣いっぱい、「百まで生きる」って笑ってた。……だから、ちよつと風邪気味だつて聞いた時も、彼はいつも通り仕事に出かけたんだよ。花火作りの追い込みだったし、まさか帰ってきた時には、冷たくなってるなんて夢にも思わなかったから……。

婦人　天寿を全<sup>まっ</sup>うされたのよ。

若い女　恩返しをするどころか、独りぼっちで死なせちゃった、見殺しにしたのとおんなじだつて、すごく自分を責めてた。

婦人　その人のせいじゃないわ。

女　それが彼の不幸な話？

若い女　？

女　（ノートに書き）そんなことで爆弾なんか作る？

若い女　（しばらくノートを見て）……両親いる？

女　？

若い女　生きてる？

女　（頷く）

若い女　兄弟は？

女　（頷く）

若い女 あたしはね、もう誰もいない。あの人も、おばあちゃんが最後の家族だった。みんな死んじゃった……。でもだからって、大事な人が死ぬことに、慣れたりはできないよ。いつでも後悔は残るし、まだ自分にできることがあるなら、どんなことでもしてあげたいと思う。他人から見れば馬鹿みたいなことでも……。おばあちゃんはね、山や川が消えていくのを本当に悲しんでたんだよ。この風景をなんとかしてあたしたちに残したいって。だから……。

婦人 (涙ぐみながら) でもね。あなたたちは生きてるんだから、山や川の未来よ  
り、自分の未来のことを考えないと。

若い女 ?

男 奥さん、書いてあげないと。

男、急いで婦人の言葉を書き取り、若い女に見せる。

若い女 (ノートに顔を近づけるが) ……字が汚くて読めない。

医者 意味ねえじゃねえか。(男からノートを奪い、書き込んで若い女に見せる)

若い女 (読む)

医者 あんまり死んだ人間に囚われるな。

若い女 (頷き) だからあたしたちは一緒にいなきゃいけないの。ここから一緒に、  
花火を見なきゃいけないの。

駅員 ここからは見えないと思うんですけど。

若い女 今年の夏には、どんな花火にも負けないくらい、高く大きく上がる花火を  
作るって言った。ここからでも絶対見えるって。

婦人 それ、お父さんが注文したのよ。どこの花火大会にも負けない立派な花火を  
作ってくれる工場を必死に探して……。なんて偶然なんでしょう。ミキちゃんの恋  
人はその職人さんなのね?

若い女 これが最後になるかもしれない……。あんな事件を起こしちゃったら、も  
う花火職人には戻れないかも……。

沈黙。そこへ紳士の歌声が。

紳士 (声だけ) ♪たくまねくぎ、にくんじくん、じゃくがくいもく♪

歌を歌いながら、紳士、登場。

紳士 ♪そくして、なくにより牛肉く牛肉く、牛肉あつてくの、ビーフカレー♪  
福神漬けを買うのを忘れちゃってね。

婦人 お父さん、大変。花火を頼んだ職人さん、ミキちゃんの恋人ですって。

紳士 じゃあ是非とも彼を応援しなくちゃいけないな。

男 いつから犯人の味方になったんです？

紳士 花火大会の楽しみが増えたじゃないか。それにしてみんな浮かない顔だな。  
婦人 今、みなさんのたいへんな身の上話を伺っていたものだから……。

駅員 (それぞれを示しながら) 代々の借金持ち、介護で苦勞、テロで両親死亡。

医者 そうやって聞くと身も蓋もないな。

男 先生はボンボンで苦勞知らず。

医者 明日から、メシ、抜きな。

紳士 そうか、不幸話のコンテストだな。

駅員 それで彼女は、天涯孤独で耳が聞こえず、恋人に逃げられています。

紳士 そりゃあやっぱりミキちゃんじゃないの？ 耳が不自由なのは大きいよ。はい、ミキちゃんの優勝！。

女 不自由って言うなら、この人でしょう。読み書きもできない上に、高級娼婦との恋を反対されて、そのマルグリットとかいう恋人とは死に別れまでしてるんだから。

医者 そういうことをべらべら喋るなよ！

婦人 まあ、まるで『椿姫』のようなお話ね。

青年 そう、椿姫。知ってる？

婦人 あら、やっぱり？

女 ……なによ……。あれ、あなたのことじゃないの？

青年 舞台上で踊ったことあります。

駅員 作り話は反則だなあ。

女 ……だましたわね……。

青年 不幸な話が聞きたかったでしょう？

女 (怒りに震え) 人を馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ！

婦人 まあまあ先生、彼も悪気があったわけじゃないでしょうから。

女 五百円払えば、なにを言ってもいいと思ってるの？ それで悲劇のヒロインにでもなったつもり？

男 (とめて) 彼、男性ですから。

女 (怒りおさまらず) あたしはね、絶対嘘をつくなって言ってるんじゃないの

よ！ 時には嘘をつかなきゃいけないことだってあるわよ！ でもそういう時は、誰かをだまさないきゃいけない時は、最後まで徹底的にだまし通すべきなのよ！

青年 ……だまされたことがあるですね。

女 ……。

ピアノの音。指一本で弾いているような、易しく優しいメロディ。

婦人 (場を取り繕うように青年に) 椿姫を踊ったなんて素敵ね。今度、舞台がある時は知らせてちょうだい。観に行くわ。

青年 舞台はもうない。引退したです。

紳士 その若さでかい？

青年 テロの時、怪我したです。

男 治ったんでしょう？

青年 元通りと違った。バレエ団には戻れなかった。

紳士 じゃあ、どうして毎日、トレーニングしてるんだい？

駅員 そんなとっておきの不幸な話をどうしてしなかったんですか？

青年 うーん……。

医者 無闇に詮索するなつて。

青年 ……機械は、壊れる。

婦人 ほら、混乱しちゃったじゃない。

青年 動いた機械が動かなくなる。それは機械でなくなったと違う。ぼくは、とても高く跳べた。今は跳べない。でもぼくは、踊れなくなったと違う。ほら。（優雅に軽く体を動かして見せて）踊れなくなったではないです。だからぼくは、不幸と違う。不幸とは思わないです。

問。

女、貯金箱から五百円玉を一枚取り出し、青年に返す。

青年 ……だましたから？

女 不幸じゃない人からはもらわない。

婦人 ……つらいことはね、洗い流してしまうといいわ。（青年に）あなた、うちでお風呂に入りなさい。

青年 ぼくの家、シャワーあります。

男 こちらのお宅はライオンの口からお湯が出ますよ？

婦人 見てみたいでしょ？ お夕食も食べていったらいいわ。いいでしょ？ お父さん。

紳士 じゃあ、私は急いで福神漬けだ。（買物へ行くため退場）

婦人 先生方もよろしければ。

医者 母が準備をしますから。

女 私も妹が……。

婦人 そう、残念だわ。それではまた明日。さあ、行きましょう！

婦人、三人を連れて退場。

夕暮れ。

駅員 (満足気に) いやあ、不幸話もいろいろですね。

医者 ……楽しそうだな。

駅員 (へらへら笑って) あ、観察ノート忘れちゃった。

駅員、軽い足取りで退場。

見送る医者と女。

医者 ……あなたはちっとも楽しそうじゃないな。

女 ……。

医者 なんでそんな商売始めたんだ？

女 ……。

医者 なんで五百円なんだよ。

女 五百円じゃない。五百円「玉」。

医者 ……変わったこと考えるよ、あんたたちは。

女 あんたたちは？

医者 アイツ。もしそういう商売があったら、世話になりたいって言ってたんだ

ろ？

女 ああ、テロリストね。

医者 あんたたち、似てるのかもな。

女 あたしは爆弾なんか作りません。

医者 手近なところに山ほど火薬があつたら？

女 あつても作らない。

医者 ……気持ちを整理する方法を、間違えたんだらうな。

女 犯罪に手を染めるなんてバカのことよ。

医者 あんたは利口なの？

女 ……どういう意味よ。

駅員、小走りで戻って来る。

駅員 (医者に) 先生、今、お母さんから電話があつて、早く帰ってらっしゃいて。

医者 おふくろ？

駅員 ええ。病院にもいないし、きっと駅前の公園あたりで道草くつてるはずだから、伝えてくれって。

女 完璧に読まれてるわね。

医者 ……幼稚園児か、俺は。駅に電話までしてなんなんだよ、一体。

駅員 警察の人が待ってるそうです。

間。

医者 ……帰りますよ……。帰りやいいんですよ。それではみなさん、さようなら。  
(帰りながら) あーあ。いつまでも暑いな、まったく……。

医者、ため息をつきながら退場。

見送る駅員と女。

駅員 先生、なにしちゃったんでしよう。

女 ……ほんとに楽しそうね。

駅員 (ニッコリ笑って) 居心地の問題ですよ。

女 ……は？

駅員 例の不幸な女の話ですけど、彼女は どうして子どもを殴るようになったと思  
います？

女 さあ……。

駅員 殴るだけじゃないんですよ？ ろくに食事も与えなくなったんです。

女 八つ当たりじゃないの？

駅員 私が思うに、多分あの人は、自分より不幸な人間が必要だったんじゃないか

な。

女 子どもの不幸を願う親がどこにいるのよ。

駅員 いるんですよ。そういうどうしようもない親も。でもね、もしそうだとしたら、彼女は殴る必要なんてなかったんです。子どもにとって、自分の親は不幸だったという思い出が残されることほど、やりきれないものはないんですからね。

女 ……その子、今はどうしてるの？

駅員 一人で元気に生きてますよ。学校に行ってた頃は大変でしたけどね。痩せてて姿勢が悪いし、みんなからいじめられて。登校拒否をしようにも、いじめられるのは家にいたって同じだし。

女 教師はなにをやってたのよ。

駅員 でも、理科の当番になってから、その子は少し変わったんです。

女 理科の当番？

駅員 百葉箱の観察をいいつけられたんです。（百葉箱に向かう）毎日学校に行く理由ができたんですよ。気温の変化を記録することで、明日が来るのも楽しみになった。お！ 今年最高の三十四・二度。

女 ……。

駅員 （メモを取りながら）ダンサーの彼から、五百円取りませんでしたね。

女 だって彼は……。

駅員 あの人、いいですよ。無理な注文もしなければ、叶わない望みも抱かない。自分の置かれた状況になじむことなら、私も負けてないつもりなんですけど。

女 そんなふうにあきらめてたら……！

駅員 あきらめるんじゃないですよ。受け入れるんです。

女 ……。

駅員 ただ、彼とは育ちが違うからなあ。怯えながらのひもじい暮らしをあんまり長いこと続けてたせいかな、私は人が幸せと呼ぶようなことには、どうもなじめないんですよ。落ち着かないんですよね。

女 ……それでいいの……？

駅員 ……あなたはいいんですか？

女 ……。

踏切の音。

駅員 私なら、人の不幸話は聞くだけでいいな。でも、あなたは五百円とる。……  
どうしてですか？

女 ……。

駅員 お金もらっちゃったらその不幸、引き受けることになりませんか？

電車の音。駅員、ヤカンと蚊取り線香を持って慌てて退場。

女、貯金箱を手に持って振ってみる。何の音もしない。

女、退場。暮れていく公園。

## 6 実験と原田さん

照明は陽の長い夏の夕方。

花火大会当日。それを予告する打ち上げの音。

蟬の声。

ピアノの音。もどかしいほどゆっくりではあるが、音が外れるようなことはない。

女が後ろを振り向きながら現れる。やや怒っている様子。

貯金箱を置き、ベンチに座るなり、せわしなく扇子で扇ぎながら、書き方ノートを眺め始める。

婦人が買い物籠を持って現れる。

婦人 生徒さんは？

女 歩いてます、例の速足で。休憩だそうです。今日、二回目です。

婦人 この暑さの中、よく頑張りますねえ。

女 気が知れませんか。

婦人 あら、先生のことですよ。

女 は？

婦人 毎日、熱心にお勉強をみてあげてるじゃないですか。

女 小学校まで日本にいたくせに、ひらがなしか読めないなんて許せないんです。

婦人 (ベンチに腰掛け) 面倒見がいいんですよ。

女 あなた方ご夫妻にはかありません。素性もよくわからない人間を二人も居候させてるんですから。

婦人 (クスクス笑って) 今日は主人と仲良く三人でお弁当を作ってますよ。

女 あの三人で……。

婦人 ミキちゃん、とにかく耳がよくなって助かったわ。もう大声で話しかけなくてすむもの。彼の蓄膿症もすっかりいいようだし、本当に須崎先生さまさまね。

女 腕はいいんですか？

婦人 お父様の頃より評判がいくらいですよ。

女 口は悪いのに……。

婦人 須崎医院もいい跡取りをもらったわね。

女 ……もらった？

婦人 あの先生、養子なんですよ。皮肉なことに、施設から跡継ぎをもらった途端、奥様に男の子ができて。その弟さんは確か今、大学病院にお勤めじゃなかったかしら。

女 そうなんですか……。

婦人 小学生の頃なんて、それはおとなしいお子さんだったんですって。弟さんの面倒もよくみていたそうですし。

女 想像できませんね。

婦人 あの先生も、案外苦勞をなされたのかもしれないわね。

蝉の声。

婦人 ……先生、学校でなにかあったんですか？

女 え……？

婦人 娘から聞きましたよ。保護者の方と喧嘩なされたんですって？ 夏休み明けには学校を辞めてしまうかもしれないって、噂になっているそうですけど……。

女 ……。

婦人 ……あの……これ、もしよろしかったら……。

婦人、買い物籠の中から重そうな巾着袋を取り出す。

女 なんですか？

婦人 なんとなく貯まってしまったものですから……。

女、袋の中身を出す。こぼれ出る五百円玉。

女 どういうおつもりですか!?

婦人 (ブタの貯金箱をそっと撫で) ……もし、お金に困っていらっしやるなら……

…

女 困っていません！ やめてください。

婦人 (急いで五百円玉を片づけながら) ごめんなさい。余計なお世話だったわね  
……。

気まずい沈黙。

婦人 ……風が出てきましたね。

女 ……そうですね。

婦人 今夜の花火は大丈夫かしら。

女 大丈夫じゃないですか。

婦人 ミキちゃんの恋人、現れると思います？

女 さあ。

婦人 ……（気分を変えて）そう言えば、郁ちゃんは学校でどんな様子ですか？

あの子、うちではやりたい放題だから心配だわ。ちゃんと先生の言うことを聞いて、いい子にしているのかしら。

女 いいえ。

婦人 （かなりショック）……まあ、どうしましょう。すみません、私たちの躰が

……

女 私が「いい子」と呼ぶのは、教師にとって都合のいい生徒のことです。こちらの顔をうかがって、教師の喜びそうなことを、目の前でしてみせる子どもにとです。

婦人 ……。

女 ……小林君のことなら、今の担任に聞いてください。きっと、正直で明るい、とてもいい子だという答えが返ってくるはずですよ。だからどうぞ安心なさって、ご主人とのんびり楽しい毎日をお過ごしください。

間。

婦人 ……先生がどんなことで悩んでらっしゃるのかは知りませんが、あまりヤケになってはいけませんよ……。あなたはまだお若いんだもの。これからどんなことだつてできるじゃありませんか。ミキちゃんたちだつてそうよ。耳も鼻も、治療をすれば治るわ。……私たちとは違う……。なんにもできずに、誰からも相手にされなくなる年寄りとは違うんですから。

女 そんな卑屈にならないでください。

婦人 先生も年をとればわかります。もう誰もあたしを名前でなんか呼んでくれないわ。「奥さん」とか「おばさん」とか、産んだ覚えもない人から「そのおなかあさん」なんて言われるのよ。主人だつて、……まあ、主人のことはあたしも

「お父さん」て呼ぶから、おあいこかもしれないけど……。私にはちゃんと、「うらら」って名前があるのよ。……ちよつと恥ずかしいわね、この年になると……。

女 ……いいお名前です。

婦人 でもそのうちただの「おばあちゃん」だわ。だんだん体の自由がきかなくなつて、手のかかる生き物扱いされて、いずれこの世からいなくなるのよ……。

女 それは私たちだつて同じですよ。

婦人 同じじゃないわ。私たちには残された時間がどれくらいあるかわからないのよ。

女 時間はまだたっぷりありますつて。日本人の平均寿命はですね……

婦人 そのたっぷりある時間と毎日戦わなければならぬのよ。子供や孫の世話から解放されたなんて言えば聞こえはいいけど、誰からも頼りにされなくなつただけじゃない。

女 今はあの二人に頼られているじゃありませんか。

婦人 今だけでしょう？ 明日にも出て行ってしまふかもしれない人達よ。また蟬の抜け殻を拾つて暮らすの？ 夏が終わつたらなにをすればいいの？ 老人ていうのは職業じゃないわ。みんな二言目には「のんびりしろ」つて言うけど、今までのんびりなんてしたことないのよ。どうしたら「のんびり楽しく」なんて暮らせるの？

女 なにか……やりたいことをみつれたり……。

婦人 やらなきゃいけないことはみんなやつたわ。家中に手摺をつけたし、遺言も書いてやつたし、お墓だつて作ったわ。あとはなに？ 入れ歯？ 自分の歯があるうちに入れ歯を作れつて言うの？

女 老後の備えばかりじゃないですか。

婦人 備えあれば憂いなしなんて嘘ね。

女 私が言ったのは、やらなきゃいけないことじゃなくて、やりたいことですよ。

婦人 それがわかれば苦労はないわ……。

ピアノの音。

青年、ウォーキングをしながら登場。

青年 (婦人に) こんにちは。(そのまま通り過ぎようとする)

婦人 待って!

青年 ? (その場で足踏みを続ける)

婦人 ……あなたはこれからどうするの?

青年 (時計を見て) あと十分ウォーキング……

婦人 もう舞台には立てないんでしょう? ご家族をなくして、夢も閉ざされて、

これから先の長い人生をどうやって生きていくつもりなの?

青年、足踏みをしながら考える。

婦人 ……わかるわ……。おっらいわよね。

青年 実験だから。

婦人 ……なあに?

青年 ぼくには全部、実験。つらいことない。

女 失敗しても?

青年 (足踏みをやめ) 実験は、こうなるはずと思ってはいけない。それでは実験にならない。人生は、レッスンなしの、一度だけの本番が続くこと。だから失敗はない。

女 それでもこんなはずじゃなかったって思うことはあるでしょう?

青年 なにも思わなければ、思い違いはないです。

女 ……。

青年 バレエはいいよ。頭の中から、余計なこと、全部消える。体が疲れる、なにも考えないで寝る。朝が来る。

婦人 ……そうよ。若い人はそうでなくっちゃ……。先生、少し見習って。

青年 若い、若くない、関係ない。

婦人 あるわよ。

青年 ない。やり方は自由。八十歳は八十歳の実験をすればいい。

婦人 ……（女に）私、八十歳に見えます？

女 ……例え話だと思いますよ。

青年 実験、実験。（と、またウォーキングを始める）

女 （軽く追いかけて）ちよつと、どこ行くのよ！

青年 （去りながら）ウォーキング。あと十分。（退場）

女 もう！

婦人 （ぼんやり立ち上がり）実験ねえ……。 （買物へ向かうために歩き出し、ふと）あ、それじゃ先生、今夜、花火の時に。

婦人、買物へ向かう。

そこへ医者、登場

婦人 先生も。今夜、八時ですよ。おなかすかせて来てくださいね。（退場）

医者 はあ？……（女に）なんの話？

女 花火見物だった。

医者 ふーん。あんたも来るの？

女 この間、警察になにを訊かれたのよ？

医者 ……あんたは聞くばかりで、自分からはなんにも言わないんだな。

女 そつちこそ、養子だなんて言わなかったじゃない。

医者 ……（婦人の去った方を振り返り）……おしゃべりじゃないお婆さんはこの世に存在しないのか……。

女 なに不自由なく育ったとか、モリモリ食べたとかさんざん皮肉を言われて、どうして黙ってたのよ。

医者 不自由なく、美味しい物を食べて育ったのは事実だからだ。大体、小学校へ入る時、親に言われるまで、俺だって養子だなんて知らなかったんだからな。

女 ……知らなかったんだ……。

医者 覚えてるわけないだろ。俺がもらわれてきたのは三つの時だぞ？

女 小学校に入る時って……六つの子に？

医者 学校入って、なにかの拍子に他人から聞かされるより、ちゃんと説明しといた方がいいと思っただら。

女 それにしたって……。

医者 人をだます時は、最後までだまし通すべき、か？

女 ……。

医者 そりゃちよつとは思ったよ。気にするなって言うなら、黙っててくれりゃいいのに、六歳の俺がどうして、そんな話を聞かなきゃいけなかったんだって。…

…ガキの頃は時々な。

女 ……。

医者 アイス食ったら忘れたけどさ。

女 ……恨んでる？

医者 こんな立派なお医者さまにしてもらったんだぞ？ 恨むわけないだろ。感謝してるよ。

女 ……お医者さまやってて楽しい？

医者 厳しいことも多いよな。（女の持っている本を見て）それ、イソップ童話だろ？

女 え？

医者 あれ、載ってる？「狼が来た」って嘘つく少年の話。

女 （ページをめくり、読む）「嘘ばかりついていると、肝心な時に信用してもらえません」。

医者 （本を手に取り）教訓つきかよ。イヤな本だな。

女 （取り返し）その話がなんなの？

医者 悪いのは少年だけか？

女 羊が食べられちゃったのは少年の嘘のせいでしょ？

医者 その時は嘘じゃなかったろ？

女 そうだけど。

医者 信じなかった方にも責任はある。駆けつけなきゃいけないかったんだよ、大人たちは。「助けて」って言われたら、たとえ嘘だと思っても、助けにいかなきゃいけないんだ。

女 …… 医者の仕事も同じってこと？

医者 そ。「痛い」と言われたら、助けなきゃならない。

女 嘘だと思っても？

医者 痛みつてのは主観だからな。どこにも異常がなくなつて、本人が「痛い」つて言うなら、それは本物なんだよ。医者は向き合い続けるしかない。

女 楽しくはないわね。

医者 治せりや気分はいいよ。

女 治せない病気だつてあるでしょ。

医者 …… 原田のばあさんの話、したよな？

女 どこも悪くないのに来る人？

医者 正確に言えば、どこも悪くないわけじゃない。耳だつて昔よりは遠くなつてらるだろうし、気管支だつて弱つてらるだろ。八十越えてるんだからしょうがないよな。それは本人もわかつてる。だからばあさんは、治してくれとは言わない。そのかわりに、「体重が増えた」だの「嫁が冷たい」だの、自分のことを山ほど喋つていくんだよ。

女 …… 跡継いで、後悔してない？

医者 なんて？

女 向いてないわよ。

医者 評判はいいけどな。

女 そんなふうには全部受け入れてたら身が持たないじゃない。

医者 過保護に育てられた割に、体は丈夫なんだ。

女 親に遠慮してるんじゃないの？

医者 してないよ。

女 ほんとは恨んでるんじゃないの？ 養子だなんて言われさえしなければ……、

医者 （女の言葉を遮つて）病院やっててわかつたんだ。患者はみんな、自分のこ

とをわかってもらいたがる。とにかく聞いてほしいって奴ばかりだ。でもそれ  
って、患者だけじゃないんだよな。人はさ、話はなしたいんだよ。そういう生き物な  
んだ。秘密なんて、そうそう抱えていられるわけがないよ。

女 口の堅い人間だっているわよ。

医者 そりゃそうだ。だからあんたは儲からない。

女 愚痴をこぼす人はうんざりするほどいるじゃない。

医者 本当に不幸な奴は、話なんてしないんじゃないか？

女 どうして？

医者 話すためには考えなきゃならないだろ。

女 そんなのあたりまえじゃない。

医者 自分がどんなひどいところにいるかってことをだぞ？

女 なんにも考えないで、どうやってそこから抜け出せるっていうのよ。

医者 抜け出そうなんて思わないんだよ。

女 思いなさいよ！

医者 俺に言うなよ！ あんただって言ったじゃないか。幸せを否定するのが不幸  
だって。

女 ……それじゃ救いがなさすぎる……。

医者 なんにも考えず、その状況になじむことが唯一の救いなんだ。そういう人間  
たちから聞き出す話が、一体あんたのなにになるわけ？

青年、ヤカンと湯のみを持って戻ってくる。

医者 今日はおまえがお茶当番か？

青年 今日は花火大会で人出が多いから、彼は駅から離れられない。夜には交代で  
きるから、見物には必ず参加する。そして、麦茶をどうぞって。それから、新し  
い不幸な話があったら、絶対教えてと彼は言ってた。

医者 あの駅員、いい奴なのか悪い奴なのかさっぱりわからないな。

青年 駅の人、たくさん待たせて麦茶くれました。とてもいい奴です。

医者 百葉箱の観察も今日は休みか。

青年 代わりに観てあげますか？

女 余計なことはしなくていいの！ そんなことより、いつまでサボれば気がすむのよ。書き順とか敬語とか、覚えることはたくさんあるんだから。

青年 ぼくがお考えなのは……

医者 誰を敬ってるんだよ。

青年 (麦茶をつぎながら) 彼がいただいた麦茶をいれてくださいますので飲みなさい。

医者 無理やり丁寧に言おうとするな。完全に間違ってるから。

女 馬鹿だと思われるわよ！

青年 はい。でもぼくは……

女 そんなんじゃないちゃんとなにかを伝えたい時に……

青年 大丈夫。

女 なにが！

青年 伝えたい時は、踊るから。

間。

青年 麦茶。

三人、麦茶を飲む。

花火を予告する打ち上げの音。

女 (青年に) ……花火、見に来るんでしょ？

青年 はい。

女 今日はもう終わりにします。一度帰って、シャワー浴びて来なさい。(医者に) あんたもね。

医者 俺にまで命令するなよ。

女 解散。

青年と医者、退場。踏切の音。

女 (ハツとして) 警察になにを訊かれたか答えてない!

女、退場。

電車の音。

辺りは夕暮れから夕闇へ。

## 7 花火と幸せになる方法

濃い青になりきった夜。

紳士を先頭に、婦人、若い女、男、青年、女が公園に集まって来て、手分けしてシートを敷いたり、お弁当を広げたりし始める。

男 でもご主人はスポンサーなんですから、会場に行けば、立派な特等席があるんじゃないんですか？

紳士 そうだけど、ここがミキちゃんの待合せ場所なんだからしょうがないじゃないかな  
いか。

婦人 ゴミゴミしたところよりいいじゃないの。涼しくて静かだし。

男 だからって全員ここにいなくても……。

若い女 あたしは一人で大丈夫……。

男 彼女だって恋人との再会は二人きりの方が……。

女 言っただけのことと違うじゃない。

男 だって、犯人が現れたら怖いじゃないですか。

婦人 こっちにいらっしやい、ミキちゃん。今夜の主演はあなたなんだから。

婦人はほとんど無理やりに、みんなのど真ん中へ若い女を座らせる。

紳士 さあ、準備万端だな。いつでもいいぞ。

男 ……（若い女を見て）この態勢はまずいんじゃないやありませんか？

婦人 あら、どうして？

男 相手は指名手配中の犯罪者ですよ？ 我々がぐるりと彼女を囲んでいたら、会  
いに来づらと思いますけど。

青年 お誕生日みたい。

婦人 そういうものかしら……。 （女に） どう思います？

女 私だったら、まず近寄りません。

婦人 それじゃ困るわねえ。

紳士 だったらミキちゃんはそのベンチに座っておいで。こっちはなるべく知らん  
ぷりしてるから。

若い女、東屋のベンチに座る。

みんな夜空を見上げて花火を待つが、一向に始まらない。

男 ……上がりませんねえ。

婦人 今日中止なのかしら。

紳士 そんなことあるもんか。

若い女 （立ち上がり） ……あたし……。

紳士 なんだ、ミキちゃん。おなかへっちゃったのかい？ それなら先に食べとき  
なさい。

男 いただきます。

紳士 君はまだダメ。いっぱいつまみ食いしてたバツ。

婦人 そのうち始まるわよ。そうしたらいただきますしよう。ほら、ミキちゃんも座  
って！

若い女 ……。(座らない)

男 せめて乾杯くらいしませんか？

女 あの二人がまだじゃない。

男 ……待つんですか……。

婦人 なによりミキちゃんの恋人が来なくっちゃ。

男 待つんですか!?

青年 (立ち上がり) 退屈なら、バレエ教えてあげます。

婦人 あら、いいわね。

青年 はいみなさん、立ってください。(一人一人を立たせながら) はい、立って。

全員、一列に並んで立つ。

青年 初めは正しい立ち方から。踵をつけて、つま先を開いて、頭の位置を決める。

背骨はまっすぐ上と下に引っ張りあうように。腕はこう、大きいケーキを抱いてる。(一人一人を見て回り) お尻をしめて。胃は引っ込める。力、入れすぎない。

両肩は下げて、あごを少し上げて。首すじのぼして。視線まっすぐ。それではケーキつぶれてしまう。

誰一人としてまともにできない。

青年 ……誰も立てない。

男 こんなことができたなら、バレリーナに再就職しますよ。

青年 では基本はなし。次は花火になってみましょう。

婦人 どうすればいいの？

青年 自由にどうぞ。あなたが花火になったつもりで。

それぞれが体を動かし花火を表現。体も動作もとにかく固い女、気持ちの入  
りようでは誰にも負けてない紳士、意外に様になっている婦人、バタバタと

見苦しい男。

女 (青年に) 笑って見てないで、お手本見せなさいよ。

青年 はい。

青年の踊る花火。故障など感じさせない美しく力強い動き。

全員がみとれているところへ駅員、登場。

駅員 なにしてるんですか？

婦人 花火よ、花火。

青年 あなたも踊って。

駅員、踊る。どうにも情けない動き。驚くほどかつこ悪い。

紳士 なんだそれ。君ね、花火はもっところだよ。(踊り出す)

医者、さりげなく辺りを窺いながら登場。

医者 (踊っているのを見て、やや仰天) なにやってるんだ？

女 遅刻よ。

婦人 (医者の手をとり) ほら、先生も踊って踊って。

医者 (無理やり踊らされ) なんだだよ。これ全員やらなきゃいけないのか？

女と若い女を除く全員が、飛んだり跳ねたり回ったりしていると、紳士、軽  
いめまいを起こす。

婦人 お父さん！

紳士 ああ、急に動いたからね。

医者 はしやぎすぎだよ。

駅員 年、考えないと。

男 お水、持ってきたましようか？

紳士 大丈夫、大丈夫。それより花火はどうなってるんだ？

駅員 ああ、中止かもしれせんよ。

紳士 なんだと？

駅員 爆弾犯の作った花火を打ち上げるのは問題があるって、今、もめてるらしいです。

紳士 主催者の私に断りもなくなにをゴチャゴチャやってるんだ！ 電話で文句言  
ってやる！（ややふらつく足取りで退場）

駅員 ほとんど命懸けですね……。

男 よつぼど花火が好きなんだなあ。

婦人 花火が好きなのはね、私たちの孫なのよ……。

女 小林君？

婦人 あの子、花火が上がるたびに大はしやぎしてね。それで去年、約束したの。

来年はおじいちゃんが、郁ちゃんのために世界一大きい花火を上げてあげるって。

……今年は娘たちと、ハワイ旅行に行っちゃったけど……。

駅員 それで花火も上がらないじゃ、踏んだり蹴ったりですね。

女 まだ上がらないって決まったわけじゃないでしょ。

婦人 いいのよ。こうしてみなさんとお会いできただけでも楽しいわ。

男 おかげで私も、お孫さんの分のお菓子をたくさんいただきましたし。

婦人 一日で全部食べちゃうとは思わなかったわ。

若い女 あたし、行かなきゃ……。

駅員 どこへ？

婦人 お菓子なら私が買いに行くからいいのよ？

若い女 行かなきゃ……。

男 まさか、みんなが花火に気を取られてるうちに、どこかに爆弾を……。

若い女 もし花火が上がらなかつたら、あの人……。

男 (恐怖にひきつり) 代わりに爆弾を？

医者 うるさいよ！(若い女に) 妙なこと言ってあんまり刺激するな。

女 上がらなかつたらなんなの？

若い女 ここには来ない……。

男 (ホッとして) なんだ……。

婦人 大変。会えなくなっちゃうわ。

駅員 自首もさせられませんね。

男 それは大変！

医者 うるさいって！

紳士がプンプンしながら戻ってくる。

駅員 どうでした？

紳士 言うだけは言ったけどね。なんだか混乱しててよくわからんよ。

婦人 待ってみるしかないわね。

紳士 くそう！ 私の花火なんだぞ！(よろめく)

男 大丈夫ですか！

婦人 こっちで少し横になったら？

みんなで紳士を休ませている間に、若い女はどこかへ向かおうとする。

医者 (目敏く) どこ行くんだ。

若い女 花火の会場に……。

医者 いいからおとなしく座ってろ。

若い女 きつと現場にいるんだよ！ 打ち上げの時はいつも……！

医者 でかい声を出すな！

駅員 先生の方が大きいですよ。

若い女 捕まっちゃう……。

男 なによりじゃないですか。

若い女 悪いのはあの人じゃない！ あたしなの！ 爆弾を作ろうって言い出したのはあたしなんだから！

男 ええーっ！

医者 それ以上騒ぐなよ！

婦人 彼を庇って嘘ついてるんじゃないの？

若い女 (首をふり) 嘘じゃない。

医者 余計なこと言うな。

男 ちよつと……ちよつと待っててくださいよ。え、なに？ それじゃあ、君が真犯人なの？

駅員 真犯人と言うより、言い出しっぺ？

女 なにか証拠でもあるの？

若い女 この中に。(手提げを差し出すと駅員が受け取る)

医者 よせつて！

駅員 爆弾だったりして。(男に手提げをパス)

男 (思わずキャッチ) いやーっ！

女 (手提げの中を覗き) いつものノートが入ってるだけじゃない。

男 (ノートを取り出し) ほんとだ……。

駅員 ノート型の爆弾だったりして。

男 いやーっ！(ノートを紳士の方に放り投げる)

医者 ふざけるのもいい加減にしろよ！

紳士 (ノートを開き) 読めないよ。

青年 ぼく、ライト持っています。(ノートを照らす)

駅員 (覗き見て) 埋立て地、ダム工事現場……？

若い女 割り箸工場、ゴルフ場建設予定地……全部あたしがやろうって言った……。

医者 おまえもいつからそんなおしゃべりになったんだよ！

女 さつきからなにを興奮してるのよ。

婦人 どういうことなの？ ミキちゃん。

若い女 ……最初は、冗談のつもりだった……。

男 冗談で爆破するのか？ あんたたちは！

若い女 だって、おばあちゃんが死んで、あの人なんにも喋らなくなっちゃったんだもん……。気がついたらあたし、「弔い合戦しよう」って言った。いつ、どこで、どんな攻撃を仕掛けたらいいと思う？ って。

駅員 過激な冗談ですね。

若い女 なんでもいいから元気づけたかったんだよ。それに、そういう遊びになら、あの人もつきあってくれたから。とにかく夢中になって喋った。目標を決めて、計画を立てて、ノートをつけて……。始めたら止まらなくなった。途中でやめたらもう二度と、喋ってくれないような気がして……。地図を買って、爆弾の作り方を調べて、材料を集めて、あとは……。あとは実行するしかなくなった……。

医者 なんで今更そんなこと話すんだ！

男 山小屋作りかなんかじゃダメだったの!?

若い女 そうだよね……。なんにも爆弾なんか作らせなくてもよかったのに……。でも耳が聞こえなくなるまでは、二人ともそんなこと気づかなかった。

婦人 耳を悪くしたのはいつなの？

若い女 割り箸工場の時。絶対来るなって言われてたのに、内緒で行って……。怖かった。こんなことおばあちゃんが喜ぶはずないって思った。バチがあたったんだよ。そこで終わりにしなきゃいけないかったのに……。

男 終わってないじゃない！

若い女 あたしだってもうやめさせたいよ！ どうしていなくなっちゃったんだらう……。一人でテロなんか続けてたら、命がいくつあっても足りないのに……。

紳士 命懸けで熱中できることなんてそうそうみつからないからね。簡単にはやめられないかもしれないなあ。

駅員 ……そうだ、今日はまだ記録を取ってないや。(と、百葉箱へ向かう)

婦人 あなた、なにもこんな時に……。

駅員 暗くてわからないかなあ……。

青年 ライト持っています。(百葉箱へ)

駅員 ああ、すいませんね。（百葉箱の扉を開けて青年を待つ）

青年 なにか落ちました。（扉を開いた拍子に落ちた一枚の紙を拾い上げ、懐中電灯で照らし、読み上げる）『ミキへ。君は、ちゃんとした道をいきなさい。ぼくは、こつちから、ちよつとこつちの方から、いくことにしたから』

婦人 それって……。

若い女 （青年から手紙を取り）なに、これ……。

医者 あの野郎……。

男 爆弾は？

駅員 ありません。

若い女 約束したのに……。一人にしないって、あんなに約束したのに。もし、あたしをおいて死んだりしたら……。

男 死んだりしたら？

若い女 ……殺すからねって。

駅員 それ、約束として成立してるのかなあ。

女 なに寝ぼけたこと言ってるの？

間。

女 そんな約束も守れない男のどこがいいの？ 「君はちゃんとした道をいきなさい」？

結局あなた捨てられたんじゃない。一見誠実そうな置き手紙をしていくような男なんて、信じてても馬鹿をみるだけよ。

婦人 言い過ぎですよ。

女 （青年を指し）さっき彼はいいことを言ってた。なにも思わなければ、思い違いないってしないって。裏切られたからじゃなくて、裏切るはずないって思い込んでいるから絶望するの。結果を受け入れないから不幸になるの。この世界が、自分のためにあるなんて思ったら大間違いよ。

若い女 ……これ以上、なにを受け入れろって言うの？

間。

若い女 両親のすぐ後、お姉ちゃんが死んで、引き取ってくれた伯母さんが死んで、一番仲のよかった友達も死んで……。世界があたしのためにあるんじゃないことは、もうイヤってほどわかってる。なのに今度は、あの人まであきらめなきやいけないの？

男 そういうもんなんですよ……。自慢じゃないですけど、私だって不幸のドミノ倒しみたいな人生なんだ……。

婦人 たくさんつらい目にあっただんだもの。そのうちきつといいことがあるわよ。

駅員 いや、世の中そんな大雑把にはできてませんよ。

紳士 (体を起こし) 私はいいことばかりだけどね。

若い女 いいことばかりの人だって、いつかは死んじゃう……。

婦人 ミキちゃん、今そんな縁起でもないこと言わないで。

若い女 みんないつかはなくなっちゃう……。

駅員 だったらいつそ最初からひとりぼっちの方がよくありません？

若い女 だから生きてる間は離れたくない。

駅員 それも一理あるなあ。

若い女 もうおいていかれるのはたくさんだよ！

医者 (走り出そうとする若い女をつかまえ) 行くなつてば！

若い女 放してよ！

医者 とにかく今はおとなしくしてろ！

若い女 だって！

婦人 ……やだ、ミキちゃん、鼻血！

男 ちり紙ちり紙！

医者 興奮し過ぎなんだよ。

医者、若い女に応急処置をする。

医者 だからおとなしくしろって言うてるのに。

男 鼻血が出るほど会いたいのなら、行かせてあげれば……。

医者 ダメだ。警察がいる。

男 でも、こっそり見に行くだけなら……。 (女の様子を窺う)

女 ……勝手にさせれば？ 期待外れに終わっても、知ったこつちやないけど。

医者 ……ずいぶん冷たいじゃねえか。

青年 (女に) なにかあった？

女 なにかってなによ。

青年 知らない。でも、なにかイヤなことがあった。だから機嫌悪い。

女 ……。

男 ひよつとして、彼女がづらい目に会わないように、親切で言ってるとか？

女 あたしはそんなお人好しじゃありません。

駅員 じゃあ、単に意地悪で？

紳士 ご主人とはうまくいってますか？

婦人 (小声で) 小宮先生は独身よ。

男 恋人にフラれたとか。

女 なんにもないってば！

青年 でも、だまされたことがある。

女 ……信じる方がどうかしてたのよ……。

駅員 男？ 男でしょ。

男 やっぱり恋人だ。

女 違うわよ！

青年 (五百円玉を取り出し) これで話を買ってあげます。(と、貯金箱に)

女 あ！ なにしてんのよ！

駅員 さあ、失恋話のはじまりはじまり。(拍手)

女 失恋なんかしてない！ なんなのよ、あんたたち。ほんとに不幸なら、もっと

それらしくしなさいよ！ 五百円玉くれれば聞いてやるって言ってるでしょ？

話をするのはそっちなの！ あたしじゃないの！

医者 でもあんたは、誰よりも不幸せそうな顔してるよ。  
間。

医者 他人の不幸話が聞きたかったんだよな？ それならもう聞いたじゃねえか。  
充分だろ？ なのになんでそんな顔してるんだよ。

駅員 儲からなかったからじゃないですか？

男 五百円玉はやっぱ地道に貯めないとダメでしょう。「五百二十五円です」って言われたら、千二十五円払ってですね……

女 あんたにそんなこと言われたくないわよ！ あたしが何年、五百円玉貯金してたと思ってるの！

駅員 三年。

女 八年よ！ ……五百円玉をあれだけ貯めるには、八年もかかった……。それを「必ず返す」ってメモ一枚で、なにも言わずに持ち逃げしたのよ。

青年 その人は友だち？

女 ……あたしは、そう思ってた……。

男 いくら貯めてたんです？

女 ……九十九万八千五百円……。

男 ひええ。

婦人 警察には届けました？

女 ……お金は、二日後に返ってきた……。

一同、沈黙。

女 (みんなを見回し) ……今「なーんだ」って思ったでしょ。

婦人 そ……そんなことないですよ、ねえ。

男 そ、そうですよ、誰もそんな……。

駅員 私は思いましたけど。

婦人 シッ！

紳士 私もちよつと思つちやつた。

婦人 お父さん！

青年 どうして、お金持っていたの？

女 知らないわよ！ 急いでた、祭日でお金がおろせなつた、友達のためにどうしても必要だつた、でも詳しい訳は言えないって言うんだから！

駅員 お金が戻つたんなら、理由なんてどうだっていいじゃないですか。

女 理由はいいのよ！

男 じゃあ、なにを怒ってるんですか？

女 ……お金は全部、一万円札で返ってきた……。八年もかけて貯めた五百円玉は、二日で百枚の紙になつたのよ。

男 でも百万は百万ですよ。

駅員 千五百円、得してますよね。

女 ……（自分の本を手に取り青年に）最初に読んだ話、覚えている？

青年 「アリとキリギリス」。

女 ……アリは、冬に備えて夏の間も食べ物を集めるのよね……。でも中には、そんなことが目的じゃないアリだっていたかもしれない……。せっせと働いた一日が楽しかった。運び込んだ食べ物のひとつひとつが大事だつた……。冬におなかがいっぱいになればそれでいいわけじゃないのよ……。そういうアリだっているのよ……。 （急に腹が立ってきて）第一あたしはアリじゃないのよ！

男 自分で言い出したんじゃないですか。

女 ……「アリとキリギリス」の教訓はこうよ。「あとで悲しんだり危険な目にあったりしないためには、いつでもすべてのことに気をつけていなければなりません」……。その通りだと思つた……。あたしは、同僚やPTAや教頭がなにを言つても耳をかさなくなつた。生徒のことも信じなくなつた。その結果、職員室にも教室にも、あたしの居場所はなくなつた……。馬鹿みたいでしょ。

駅員 ええ。

婦人 これ！

女 いいの、わかってるの……。彼は嘘をついたわけじゃない。だましたわけでもない。何度も謝ったし、お金だっすぐ返してくれた。千九百九十七枚の五百円玉が、形を変えただけのことよ。

駅員 やっぱり三枚得してる……。

青年 でも、一生懸命集めたよ？

女 そう。一生懸命集めた。五百円玉のお釣りをもらうために、財布はいつも小銭でばんぱんにしたし、買物は百の位が消費税込みで、五百円を越さないように暗算したし、月末には全部数えてからきれいに洗剤で洗ったし……。

駅員 他に趣味とかないんですか？

女 ないわよ！

男 そりゃあ腹も立ちますよね。

女 ……勘違いだったのよ……。勝手にわかってもらえるとと思ってたこっちが悪いの……。こんなのは不幸でもなんでもない。そんなことわかってる。あたしより不幸な人間なんて、ごまんというわよ。ちよつと公園にでも行けば、人生にくたびれ果てた人たちにいくらでも会えるわよ。わかってんのよ、頭ではわかってるけど……！

婦人 その目で確かめたかったんですね。

駅員 五百円玉貯金を兼ねて。

若い女 ……あたし、やっぱり行ってくる。

間。若い女に集まる視線。

若い女 あたしは、自分と他人を比べてがっかりしたり、楽になったりしたことない。そんなヒマなかったから。大事なものをこれ以上なくさないように必死だったから。今もそう。だから、行ってくる。

駅員 鼻に詰め物したままで？

遠くでパトカーのサイレンの音。

若い女 警察……？

婦人 消防車よ、消防車。

駅員 どう聞いてもパトカーのサイレンでしょう。

サイレンの音が消える。

医者 逃げろ……。

男 (早速) はい！

医者 あんたじゃない！（若い女に）ノートも手紙も全部燃やして逃げろ。

若い女 え……！

医者 いや！ やっぱり自首だ！ 逃げられるわけない。……でも証拠さえなければ……。

婦人 須崎先生？

医者 シラを切り通せるか……、待てよ、罪状はなんだ？ ダメだ、やっぱりどつ

か田舎に……ここも充分田舎か……。ああ、ちくしょう！

紳士 なにを一人でこんがらがってるんだい？

医者 あっちはどうなってんだ？ 奴がもう逃げるとすれば……。

婦人 なにかご存じなんですか？

駅員 そういえば、この間、お宅に刑事さんが……。

男 まさか、先生！ 警察の回し者なんじゃ！

医者 ふざけんなよ！ アイツのこと刑事に隠すのに俺がどれだけ……！

若い女 あの人に会ったの！

医者 (愕然と) やっちゃったよ……。

若い女 いつ？ どこで？ なんで教えてくれなかったの！

医者 ……十日前。この公園で。患者の秘密を守るのは医者義務だ。

若い女 患者って？ 怪我はひどい？ 治せたの？

医者 (絶望的なため息をひとつついて) ……顔に怪我してこのベンチに座ってた

から、連れて帰って治療した。

駅員 患者を拾うのが趣味なんですね。

若い女 顔に怪我って？

医者 きれいに縫つといてやったから安心しろ。

駅員 耳鼻科医のくせに？

医者 顔の傷縫わせるなら、そこらの外科より耳鼻科の方が確かなんだぞ。首から上は専門なんだからな。

男 次はどこを爆破するか言ってますませんでしたか？

駅員 知ってても先生は教えてくれませんよ。

医者 指名手配されてるなんて知らなかったんだよ！（若い女に）そんなことより、おまえだつてヤバイんだぞ。さっきだつて刑事がしつこくおまえのことも訊いてきたんだ。

婦人 ミキちゃん、早く逃げなくちゃ！

紳士 高飛びしたらどうだ？ ブラジルに私の弟がいるから。

医者 おまわりがうるついているかもしれないっていうのに、ギャーギャー大声出しやがつて……。

若い女 あたしは捕まったつていい。でもその前に、全部教えてよ。あの人、どんなだった？ なにか話していった？

医者 ……自分は、幸せだつて言つてた……。

若い女 幸せ……？

医者 ばあちゃんや恋人や友達に優しくしてもらつて、見ず知らずの俺にも親切にしてもらつて、本当に幸せだつて。俺が治療するのは医者なんだからあたり前だつていつたら、面倒な予約を入れていきやがつた。

若い女 予約つて？

医者 「花火大会の夜、あの公園に若い女の人 cameたら、もしもその人の耳が聞こえていなかったら、どうか治してあげてください」。そう言つて、二人分の治療費を置いていった……。

男 だから彼女はタダなのか……。

医者 それで……ここからがまた、もしかしたらややこしい話になりそうなんだが……。

駅員 なんなんですか？

医者 その治療費の支払いというのがだな……全部……五百円玉だったんだよ。

五百円玉という言葉に、みんなの視線が女に集まる。

女 (若い女につかみかかるように) 村澤信彦、知ってる？

若い女 村澤……信彦？

婦人 知ってるわ。郁ちゃんの担任の先生よ。

女 (詰め寄って) あなたの彼と知り合い？

若い女 ……「のぶちゃん」て人の話はよくしてた……。幼なじみだって……。

間。

女、大きく息を吐き、脱力。

婦人 なんだか頭が混乱しちゃって……。

紳士 お母さんもかい？

男 つまり……(貯金箱を指し)ここからのぶちゃんが拝借して、のぶちゃんから

幼なじみの犯人に渡って、犯人から先生のところにいつて……？

駅員 逃走資金に五百円玉ねえ……。かさばって迷惑じゃないですか？

医者 一枚一枚拝むように払ってったよ。こういう時のために、友達が用意してく

れた大切な金なんだって、申し訳なさそうにな。

男 ……結局、先生のせいじゃないですか。

医者 なにがだよ。

男 犯人のことを内緒にするから事が大きくなったんですよ？

医者 だから最初は知らなかったんだって！ 大体なあ、「大切な人たちを幸せにするためには、なにをすればいいんでしょう」なんて悲しそうな顔してる

奴が、まさか爆弾犯だなんて思うか？

駅員 それにしたつてもっと早く話してくれれば……。

医者 医者には守秘義務つものがあるんだ！

青年 いいこと教えてあげます。

医者 なんだよ。

青年 みんなを幸せにできること。

医者 それを知りたがってるのは俺じゃない。

青年 知っているとななたも幸せになる。

間。

青年に集まる視線。

青年 お母さんがよく言っていました。「誰かを幸せにしたいなら、まず自分が幸せでいなさい。あなたが人にしてあげられることは、それだけなんですよ」。

婦人 お母さま、いいことおっしゃるわね。

青年 それからお父さんも言いました。好きな人が不幸になると、悲しい。そうさせた不幸な人はもっと悲しい。不幸は伝染する。だからその……ぐるぐる……を終わらせるために、先におまえが幸せになって、ぐるぐるを断ち切ってあげなさい。

医者 ぐるぐるじゃなくて、悪循環とか堂々巡りとか言うんだよ。

青年 (若い女に) 彼に会ったら、教えてあげるといい。

若い女 (頷く)

青年 そして……(ノートを手にとって引き裂き、若い女に渡し) もう二度と、こんなことを考えてはいけない。

若い女 ……ごめんなさい……。

突然、次々に花火が上がる音。

紳士 (勢いよく立ち上がり) そういうことならまかせておきなさい! みんなの不幸せなんて、爆弾なんか使わずに私の幸せで吹き飛ばしてあげよう! (と、ガツポーズ。そのままゆっくりと倒れる)

婦人 お父さん! ヤダ、お父さん、しっかりして!

全員が紳士に駆け寄る。

次の瞬間、それぞれの顔を瞬間ずつ照らす様々な色の光。

あたりがゆっくりと暗くなる。

暗闇の中、ドーンという重く大きな花火の音。

## 8 夏の終わりとちゃんとした道

夏の夕暮れ。数日後。

蝉の声。

男と医者が登場。

医者 仕事が決まったからって、病院の掃除はやめなくてもいいんだけどな。

男 勘弁してくださいよ。お金ができれば、ちゃんと治療費はお支払いしますから。

医者 金はいいから、あんたが食った分の米、送ってくれよ。

婦人と紳士、登場。

婦人 ごあいさつは済んだの?

医者 (紳士に) こんな男に就職の世話なんかする前に、体、大事にね。薬、のみ忘れてない? 高血圧の薬は続けないと意味ないよ?

紳士 ……はい。

婦人 カロリーをとりすぎたのよ。子供の喜びそうなこったりしたものばかり作る

から。

紳士 野菜を煮てばっかりじゃつまらないよ……。

婦人 つまらないなら、お台所のことは私にまかせてちょうだい。

駅員が、箒とチリとりを持って、辺りを掃除しながら現れる。

婦人 あら、お精が出ますね。

駅員 そろそろ葉を落とす樹もありますからね。ここの秋は早いし。彼女、どうしてます？

婦人 おとなしくお留守番よ。

紳士 証拠になりそうなものは処分させたからね。ほとぼりが冷めるまでは、ウチに隠れていればいいよ。

婦人 なんならずと住んでくれてもいいわ。

男 私にはそんなこと言ってくれませんでしたね……。

紳士 社宅付きの就職、取り消すかい？

男 私のことが嫌いなんですか？

女、大きな荷物を持って現れる。

婦人 まあ、先生、お出掛けですか？

女 帰るんです。学校が始まりますから。

婦人 あらあ、寂しくなるわ。この人も、住むところが決まったんですよ。

男 こちらで仕事を世話していただいたんです。今頃は死んでいたはずの自分がこんな日を迎えられるのも、あの時、話を聞いてもらったおかげですよ。（五百円玉を出し）これ、お支払いしなきゃと思って。

女 もう、やめたから。

男 え……いいんですか？

女 五百円玉は、「五百二十五円です」って言われて、千二十五円払ったりしながら

らコツコツ貯めないと、やっぱり楽しくないから。

男 そうですか……。 (婦人に五百円玉を渡し) じゃあ、これ、お返しします。

医者 それも借金かよ。

婦人 お帰りになるんですたら先生、(バッグから蟬の抜け殻の入ったビニール袋を取り出し) これ、郁ちゃんに渡していただけません? 「うららさんから」って。

紳士 ……郁ちゃんにとっては本当におばあちゃんなんだからいいじゃないか。私  
がちゃんと「うららさん」て呼ぶようにしてるだろ?

婦人 でもね、大吉さん……

女 ……それは、直接お渡しになってください。いつ、どこで、どんなふうにな  
にを思いながらそれを集めたか、話して聞かせてあげてください。

婦人 そんな話、郁ちゃんが喜ぶかしら。

女 おばあ……「うららさん」が、小林君に伝えたいと思って話すことなら、きつ  
と。

婦人 ……そうね。話したいことならいくらでもあるわ。例えば朝、蟬の声がうる  
さくて目が覚めたりするでしょう? そういう日は前の晩にたくさん羽化した  
証拠だから、抜け殻がたくさん捕れるんですよ。それでめぼしいところからあ  
らかた捕り切っちゃったらね、ほら、そういうベンチの足とか、意外なところ  
を覗いて見るといいんです。他にも……

女 ……ですから、それは小林君に……。

青年、いつものように現れる。

青年 いってらっしゃい。

女 「さようなら」でしょ? あたしがいなくてもちゃんと勉強してよね。

青年 おかげさまでなにかと便利になった。ありがとうございます。

女 お礼を言うのはこっちの方かも。あなたのおかげでこの夏休みも、あたしは先  
生でいられたから。

若い女、登場。

婦人 ダメじゃないの。出歩いたりしちや。

駅員 もう探し回る必要もないでしょう。彼は留置所にいるんですから。

紳士 しかし泣かせるじゃないか。打上げ現場に名乗り出て、土下座してまで花火を上げさせるなんて。

婦人 どうしてもミキちゃんに花火を見せたかったのよ。

紳士 そういう男気おとこぎのある人間に仕事を世話したかったな。

男 私のこと嫌いなんですね？

駅員 ほんどに行っちゃったんですね。「ちゃんとした道」じゃない方に。

青年 道は戻れる。

若い女 ……え？

青年 道は川と違う。通り過ぎたらそれきりってことない。戻ることができます。大丈夫。

若い女 ……そうか…。

青年 戻れる人は、戻ればいいです。

若い女 ……それも教えてあげなくちゃね。

婦人 耳が治ってよかったわね。積もる話が筆談じゃ焦れたいもの。

紳士 がんばれよ、ミキちゃん。私も今からがんばって、彼の上司になる人をだましてくるぞ！

男 どういう意味ですか…。

紳士 さあ、行こう。

婦人 ミキちゃんは早く戻りなさい。あんまり動き回るとまた鼻血が出るわよ。

若い女 ……いろいろ心配してくれてありがとう…。

婦人 あらたまつてなに言ってるの。それじゃあいつてきますね。（青年に）花火の夜は楽しかったわ。体を動かすのって気持ちいいわねえ。私は低血圧だから、今度ダンスを始めようかと思うの。また教えてくださる？

青年 はい。いつでもどうぞ。

婦人 ご近所の奥さんたちも誘ってみるわね。(女に) 先生、どうぞお元気で。また遊びにいらしてくださいね。

紳士 その時は腕を振るいますよ。

男 お気をつけて。お体と貯金をお大事に。

紳士、男、婦人、退場。

医者 ……(青年に) 大変だぞ、おばさんたちは。

青年 そう？

医者 ずーっと喋ってるんだぞ。

若い女 (女に) ……帰るんだ……。

女 そうよ。あなたは？ あのウチの子どもになるの？

若い女、首を振って百葉箱に向かう。

駅員 また勝手にそこを使って！

若い女 (中から裂けたノートを取り出し) 警察に行ってくる。

医者 捨てたんじゃなかったのか。

若い女 こんなものがなくても、二人で話ができるようになったら、そしたら捨てる。

女 ……そう……。

駅員 取り調べって、殴られたりするんですかね。

医者 自首してるのになんで殴られるんだよ。

若い女 喋らないから。

女 え？

若い女 お金貸してくれた人のこと。あの人もきつと言わないから。

駅員 なんでもかんでも黙ってりやいってもんじゃないんですよ？

医者 ……嫌味かよ。

駅員 そうです。

医者 刑事にだって守秘義務の一点張りで通したんだぞ？ 口の軽いおまえらに、

なんでもかんでもなんて話せるもんか。

駅員 人が悪いんだから。

医者 あんたに言われたくない。

女 ご立派ですこと。

医者 ……正直言うと、俺にはよくわからないんだ。

駅員 なにがです？

医者 いろんなことなら話してもいいのかわからないだよ。自分が言ったことで、相手の気持ちや人生を変えちゃうのが怖いんだな。

女 ……生きてるからにはよくも悪くも人に影響は与えちゃうわよ。わかってもらいたいから話したい。わかりたいから聞きたい。不幸な話を聞かされれば、一緒に傷つかずにはいられない。しょうがないじゃない。そういう生き物なんですよ？ あたしたちは。

医者 ……ひと夏でずいぶんお利口になられて……。

女 あんたもここで不幸な人相手に商売して勉強すれば？

医者 耳鼻科で充分間に合ってるよ。

若い女 ……不幸な人を作るなんて、簡単なんだよ。なんにも話さないで、不安にさせて、疑わせて、誤解を生ませればいいんだもん。

駅員 (医者に) 責められてるんですよ。

医者 (青年に) 少しは味方してくれ。黙ってちゃダメだってよ。

青年 えーっと、先生という仕事は大変。上手に話して、上手に聞いて、たくさんの人を助けてあげなければいけない。

医者 よく言った！ そうなんだよ。そう考えると、俺ほど医者に向いてる人間はいないかもな。腕はいいし面倒見はいいし、聞き上手の上に口も堅いだろ？ おまけに仕事熱心だし、患者のあしらいもうまいし、説得力はあるし、なによりうちが低料金だし……。

女 ただの自慢話にしか聞こえない。

医者 ただの自慢話なんだよ。

青年 コミヤも先生だから大変ですね。

女 呼び捨てにするなつてば。

若い女 「のぶちゃん」も、先生なんだね。

女 ……そうよ。

若い女 いい先生なんだろうね。

女 人がよすぎて、ちよつと気が利かないけどね。

若い女 そこがいいんじゃないの？

女 ……かもしれない。

若い女 そういう人が必要なんだね。あなたたちみたいな人には。

女 あなたたち？

若い女 優しいくせに、へそ曲り。あなたとあの人、ちよつと似てるよ。

女 ……。

若い女 「のぶちゃん」と仲直りしてね。

女 ……あたしが勝手に、へそ曲げてただけだから。

駅員 千五百円も得したくせにね。

女 返すわよ！

若い女 ……それじゃ、あたし……

医者 ……俺も行くかな。

駅員 なにしに？

医者 あいつ、抜糸に来なかつたんだよ。気になって、ずっとこの辺りを探してた

んだけど、蓄膿だの難聴だの余計な患者が増えるばかりでさ。（若い女に）お

まえからもちやんと言つとけよ。医者 of 言うことは聞けつて。

若い女 はい。

医者 じゃあ、行くか。

女 （去りかける二人に）あ……ねえ！

二人、振り向く。

女 ……五百円玉……まだ残ってたなら……、かさばるようなら、両替にいくから……

駅員 刑務所に？

医者 うちにもあるぞ。

女 いくわよ。元はあたしのなんだからね。

医者 ま、気が向いたら、いつでも取りに来いよ。

若い女と医者、手を振って退場。

見送る女、青年、駅員。

女 ……そうだ、これ。（貯金箱から五百円玉を一枚取り出し、青年に返す）

青年 どうして？

女 人の言うことをちゃんと聞きなさい。五百円はね、話を聞いてもらった方が払うのよ。

駅員 結局、売り上げはゼロですか。

女 代わりにおかしな知り合いは増えたわ。

駅員 お互い様ですけどね。

女 （青年に）それからこれ。（とメモを渡す）

青年 なに？

女 宿題。

青年 （見て）漢字がいっぱい。

女 あたしの住所。遠く離れた人には踊っても伝わらないでしょ。手紙ちょうだい。

駅員 添削して返すんですか？

女 それもいいわね。

駅員 （青年に）通信教育だって。

青年 はい。

踏切の音。

駅員 ああ、もう行かないと！ これ逃したら、次は一時間後ですよ。

女 (女の荷物を持って行こうとする駅員に) 百葉箱の時間じゃないの？

駅員 乗り遅れたついでに宿題なんて出されちゃかないませんか。

女 (駅に向かいながら青年に) 返事出すから、住所書いてきなさいよ。フランス

語じやだめよ！ 日本語で書くんだからね！

青年 いってらっしゃい。

女 さようならだってば！

青年 さようなら、コミヤ。

女 (声だけ) 呼び捨てにするなあ！

駅員、女、退場。

夏の終わりを告げるひぐらしの鳴く声。

一人、残された青年、ストレッチを始める。

電車の通り過ぎる音。

静寂。

ピアノの音。完璧な演奏。

青年、音楽に合わせて鼻歌を歌いながら、手足をほぐし、首を回す。

鼻歌がやむ。青年、立っている。ダンスの基本、正しい立ち方。

やがて両手を広げ、深くプレパラシオン(ジャンプの前の動作)。

大きく跳ぶか？ その瞬間、明かりが落ちる。